再版

農業全書

農事總論

共十一

一

伊藤篤太郎記

特7
11
456

ガラス使用

特7－456

伊藤篤太郎記

鳳使雲書遠抵常陽校讀乃審鼎茵佳勝足以慰懷承諭貴邦宮崎安貞撰農業全書令兄樂軒删訂思一見之會京師文林登梓

ガラス使用

方道叢議一部獻之水戸
參梅里公〻熟覧曰是人世
不可一日無之書也二字圏
心可謂深切矣公自少好學
國志治教右興遊書内猶向
農圃請集農事而觀此書
乃有此之益非虚譽也農
者國之本民生資之以生若
之者猶當留心今爲此書乎
第耽遊藝之事奏戲而知

稼穡艱難。對世奨風可律
懲哉。由是觀之。稼難
不亦宜乎。山川脩阻未面晤
日。隔書悵然。

丁丑十月廿一日
佐々宗淳拜
佐佐宗淳
損軒貝原大兄足下

農業全書敘

聖人之政在敎養二者而已矣。而論其序則養爲先敎爲後。是令富而後敎之也。何則食惟民之天。農爲政之本民之爲道也無恒産者無恒心。故衣食足而後禮義可興敎化可行是故古昔明君以制民産爲先務制民産之道在敎稼穡而已。舜以棄爲后稷敎民稼穡樹藝

ガラス使用

五穀。五穀熟而民人育。然後以契爲司徒敬敷五教。五教行而人倫之道明。是聖人爲政之序也。欽亮天功之道於是乎備矣。夫人倫之教載在六經語孟炳如日星。況後世賢哲代起而更有發明之乎。如稼穡之法。中華之載籍固多而傳在本邦。足以爲農家之教。然凡民不能讀之而解其說。是以農家每昧于

種植之術。終身由之而不知其道識者以爲恨。爲余嘗欲以國字輯録之然庸劣之資治經而力常不足。況及其他乎是以既廢稿矣。本州之士宮崎安貞村居四十年。常以試種植爲樂其用心也尚矣。其執術也熟矣。且遊觀于畿内暨諸州旁爰詢謀于老農考於中華之農書驗於本邦之土宜將著書以諭農

ガラス使用

起稿十巻。命名爲農業全書。但恐有紕謬孟浪之患。而不能成書因茲請予之家兄樂軒翁之是正而不輟樂軒亦年既高邁雖不任其勞然平生利人濟物之志至老益厚不恥于古人。故不克固辭修飾數回於是易稿而成編。竊謂此書之於　本邦也。古来絶無而初有者也。若後有繼作者當以此爲　本邦農

書之權輿。然則於訓農之方豈謂無補乎。今將鋟梓以廣其傳。請序於予。安貞今茲七十有五歳。余感其爲志老而益壯。於是述此書之所以作而爲之叙

元禄丙子中和節

筑前州後學貝原篤信書

農業全書自序

夫人世にことわざ必本ありて末あり。其本をなにはりとく務へバ順にして成やすく。末とうらく行へバ逆にして成がたし。凡いにしへ聖人の政ハ専教養の二ツよやとぞ。農業の術ハ人を養ふの本也。農術くハしからざれバ。五穀すくなくしく民生養をとぐる事なし。孝弟の道ハ人を教ゆるの本なり。孝弟の教へなけれバ人倫明ならず。人の道立ずして禽獣に近し。故に先聖

の古代にハ后稷をもつて農業を教へしめ。契を司徒として世に人倫の道を教へ給へり。しかるゆへに群生の養ひゆたかに。人倫の道明かなりしことを以て堯舜の政ハ。天下万世帝王の鑑たりしよりハ以来代々の聖主賢君。天下国家を治るに必農をすゝめ。稼穡を教ることを以て先とし。人倫の道を正すを以て本となさしめざるハなし。夫人倫の道ハ。其教上に行れ閭下位よりおこる。其書を講ずる人ハ多し。力田の術ハ中

華の書術多く伝はれども。我国の農民ハ。偏に文盲なれバ。其事を講習することあたハず。又文学を専とする輩ハ。其家業にいらざれバ。是を講ずるに及ばず。古漢朝の賢君多くハ農業を重くし給ふといへども。農術を教ゆる書も定り侍りしかども。農業ハ世に安しとし。次第に今泰平の御代になりて。治上に盛なりといへども。猶農術の下に審ならざるハ。ひとへに唯。文盲なる民の弁へ

ガラス使用

心づき農書の世上に行はれざる故なるべし古ハ人すくなくして上衣食も豊なりしかバ其養ともしからざりし。人民いとまはなく農功専らなりしゆへ。本を務るのわざ則し。傳よいとゆる。是をもつて見れハ多くこれを食する者ハおゝくして五穀ゆたかならず。民食たりやすからず。万世に至るまで農ハ古の農のごとく是を費すことの八十倍せり。是則衣食乏しきゆへなり。然れども今世の民ハ農術をよく志つとめて力田に功を用る事あつきにあらずんバいかでか飢寒のうれへをまぬかれんや。我久しく民間にありて。農人の日々に勤る所をはかり見るに。其術委しからずして其業ハよくたがふる所多し。然るゆへ小功を労し心を苦しめて勤むといへども其勤をも得る事すくなくして。やゝもすれバ。秋のなりはひの不足とならんことをおほかり。是土地のあしくして又其勤めいたらざるにはあらじ欤。

唯ひとへに民の常業農術とをしらずして。稼穡の道をわきまへざるゆへなり。是誠に憐むべく惜むべきの事の甚しきなり。凡天下の事。必治乱と力作とを勤ざれども。其功あるものなし。故に先よく農術をまなびて後。農功を勤むべし。且恒の産なければ。恒の心なし。衣食たりて後。礼義おこりて調ほる。民稼植の道をよくしりて五穀ゆたかなれば。衣食の事ひらく。万民其所をえたるハ。そのつゞ膝を摩ろこびなく。

礼義廉恥おこり。風俗もまたおのづから和順し。一世安楽ならん事。是ひとへに新に著すさうんなるべし。抑日本の地ハ。南北の中央にあたるにや。陰陽の気正しく。寒暑も中和にかなへり。まことに天災地禍もなく。平原岡多くして。稲麦を植るの地ひろし。国土又豊穣に肥沃なれども。万物殖植の利物として成就せざるハなし。ところ一人和にかなふ上古ハなきことぞ聞ても。陰陽ふかく日本の刀九

ガラス使用

歌ふをし。土壌楽饒の風俗好と称美せしもことはりなり。然れども百穀ハ云に及ばず。凡人生を養ふ用乃菓草木薬種に至るまで。民用を助るなり。皆を種と求め。これを法のごとく種藝し。其術を尽しかバ衣食居室財用ことごとくたりぬべし。薬種なども我邦にあるく人の見知ざる物多し。又知れる物も種ふる土地の宜にかなはずして。或ハ其をうしなひ或術を尽さずして。其性にしたがはずして物多し。国にあな諸品乃物とよく見あり。其を種る術ハよくしらず。土地の宜にかなはず。俗国にありときは所の諺露蘭洗了。五穀種の外ハ諸菜果国に於てすくなく。民生乃用足るべし。然るにむかしより年ごとに唐舟よ。薬種の物ますく多く積来りて交易し。我国の財を徒の国の利とせる事。豈惜まざらめや。是ひとへに我国乃民。種藝の法をまなばずして。国土の利を失ふなり。又漢邦ハ諸国にても是に同じ。其外国

に稼穡のみちをよくわきまひ其国土地に出くる物と石て国用をかりなば多く我国の財をつひやさずして他国の物を買求る患なかるべし。我村里に住する事すでに四十年。ミづから心力を尽し。手足を労して農事をいとなミ。試を知る事多し。こてとちうく常にて農民の稼穡の方ようとさとす事我勤にして我愚蒙を忘れて稼穡の書をあらハして民と共に是にならはんとする事はおこの。扉に農書とある本邦の土宜にあてうべの。農功の助となるべき事を撰び。或ハ歳内諸ふはに據て一統し。廣く老圃老農に詢謀。ある稼穡を集めて十巻となし。農業全書と名付ぬ。されどかやうの著作はなれぬれどたゞ書遊の謬り鄙俚の言多きのミかハ。其義理も亦齟齬多く疎謬多からんる事を恐る。こゝにおのく我徒人貝原楽軒翁にたのミし書を改正せん事をこふといへども彼翁たゞ雅学をたてゝ乃義と楽しむ

いくとせとすゝむるゆへ此書を修潤することゝ数作鄙事とし。老境の楽を妨げん事をおそれとく。あつくうけごへども。予が曰。吾子はやまそらしわけの事たをけあくてハ成がたし。吾子が力をもつて予が功を助けて。もし天のさいはひありて。此書世にあまねく行はれ。農功乃益となりなバ。おそらくハ参賛の功の万が一の補ともならんず。[illegible]べしとぞ。これわが願ふ所にして。吾子が志もしかるらんやといふ。翁辞することをあたはずして。これが求に應じぬ。さるハあれど識淺ハみづけれども玉ともありがく紀理りなれバ。翁乃段とつて其詞をしるすく。義理明らかならずして。ある人の誹笑を招かんことを恐るといへども。後来農事に志ある智者を待のみ。志づらく今の世に農をなすことを普ふとする人のよめぶき補ひあらんことを思ひ。愚見の及ぶところを述て。つくく自己の鄙陋を綴る

といふことしかり。筑州の隠逸宮崎安貞序
于時に元禄九年仲冬の復月なる日

凡例

一 予此書を述る所以は。平生おもへらく。人は此世に生れては世に益なく。碌々として一生を草木と共に朽落せんは。偏に螻蟻にことならざるを恥べき事なれども。才なく徳なく文位なければ尺寸功をいたし天下に及し人を利すべき術なし。唯是土民を友として農事にならふ事年あり。又世の農民の其術委しからざるゆへ力をつくし農業

といふかひといへども。其功をしくかくまゝ利をしらず。しかく
きゝるところ。却て此書を述て民をみちびき。農事を
万が一の助とならんことを思ひ。農政全書を始め。諸
の農書を考へ。且本草綱目の類ハ。其中華の農書の。
我国にも用ひて益あるべきことを撰ひて。是をとれり

一　先年山陽道より畿内伊勢紀州の諸国を遊
歴し。所々老農の説を聞。其要をとりて記す

一　予壮年の後ゆへありて致仕し民間に隠居し農
るを業とせり。今我齢すでに八旬に近し。数十
年の労をつんで農術におゐてくもろしと得る
所多し。又郷国の外郷村落をめぐり。或ハ郡国に
遊んで。いよ〳〵農業の説を聞事詳なり。又予が
稼穡におゐて三折の功あるをもまじへ。了簡し
記す

一　予が故人楽軒翁ハ。聖学を好んで其志篤し。辱
ちくらつる年の後致仕し。閑寂を好みて。心を道

義に潜むる事久し。又強年の比より世を利し民を恵むに志ある事久しく。略民間の事を知り。且稼穡の事にも熟せり。されば此ゆへに彼翁。予が草創の功はたとけく。此書を刪削し全備せんことをこひ。強て予に逡拒むを破つらしめ。翁も辞せざる事あらざれど。遂に修潤して書おはれり

一 吾若きより文才なくして文詞を飾る事あたはず。且此書はひとへに農家に用る所なれども。あながちに文辞を美麗にすべきにあらず。殊に辞をやすくして農民のさとしやすからん事を思ひ。殊に俗語にうつせり

一 此書を撰せん事を思ひ多年農書典籍をうかゞひ深く心を用るといへども。いまだよくきはめざれば悉くは尽すことかたく。又あやまりも多く拙速を經歴すれども。猶天下を普くせざるを。されど年数を重ね心を労すといへども。和漢の農法はおほそ。

至不善を禁ずるがごとし。夫天地東西の国よりして氣運も又南北にひとしからずといへども、此書に記す所は畿内の事よりくはしく、此法を諸国の地味に通しがたく、又寒温の氣ことにして、此法とする所に用ひがたく、略たがへるもあらん。中について作物の農家に、これを習は必其功を積で、種芸の法を一々一條によくきはめて、其後に熟しておこなふべし。又才ある農人は稼穡に心を用ふる事厚くして、予が分見よりこえまされるもあらんなれども、我さへ年ひろく此事を心にかけて、多く唐土の書をかんがへ、又東西国に歴し、諸国の老農にも向ひ問て、作り試みし事をいくして、こる所を考へ、又其他才ある老功の農人をとひてわりとうすとも、又此書の和漢にわたり、万に偏りしたるまでこそあらん。或は国によりて所により氣運もたがひ、地味ことなりといふとも、必十にして七八はあたらずといふ事あるべからん歟然そ

れ天下の人ぜんと盛るときハかなし。必感ずるより
く作おこりあるハ必ずる一所あり。くそ端とひろ
まで又そ様ぐにわれくんかよきとりあるハ見聞ひろくよ
川くを智識へとるるありて是を此所
ふふれく事業くきざし。事業起る必是
によつて。つねにひろく世によりてわるものなり
是すなはち和漢古今の義なり。夫あとハ藍
よりいでゝ藍よりも青き理なれバ。今手に入べき

後に感じ。かへりて其人ハ是よりいとゞとゞめ
て。ますます是を心とこゝろざし農業の道にさらの
かり深く万民とめぐみ。よく農業を教へすゝめさ
せ。又下なる民ハ是より田くんばかりとく農
事工夫を篤くし。其勤をあしくせば。上下
ともに和順し。農術あまねく万国に備べし。又
穀一生によくゆたかに國を民さらへ求ずとも財
穀みちて倉へらず。しかく国用豊となり。貴賤ひと

しく安楽ならんや。是必當とするところなく

らんや。是則邑落務等ごとに至道理。今より後篤く

才人智者に深く望む所なり

一 此書は麁挽。大抵を序にあらはしすなはち綱を能きことを

楽軒堂重ねて委しく略記せり。又耕作の義は味ハ考

惣論に述けり。然れば此書は大意をしらんと欲

らば。右の条々を熟読すべし

一 此書まへ名字は右よりかなを付るは。農人へとして讀

心得んがためなり。其人々わかりやすきを好しとするゆへ

故に鄙俗の点もまゝかな。此書にて字ん心たがふるもあり

一 農家は此書をよく〳〵大概ときゝとるといふとも。日

々にいよ〳〵ふむ農事につゐて心を尽し力を用

ゐ。實に其理を事ぬよく熟行し。勤て修練を

とくせずんハ。唯是無益の徒なるべし。たとへバ儒者

とまなんで。四書小学を熟読し。其餘の經書を

も粗通じ。字義。訓詁を諳じ。且講説ことに詳

ガラス使用

なりといへども。徳義を尊信し。深く心を用ひ存養省察克治の功をはげみ。真知を求むる者勤ざれバ。彼道義の楽をしらざるハ。譬して文盲の人のごとし。古書も文も只同じなり。これを翫ひて経記論をよむ人ありとも。徳によはるゝといふべく。ようくハ口遊。一座の物語として農業の益よおかくハ。真実に心を励ミ。思ひを累しかと心ひくこれをんと意ミ。こてひ情をおもう労

かくしてハ。大に志をとぐる事かなふべし。農民殊かこれにおなじく。心をとゞめ力をつくすべし。しかれバあれど。是平生農家のいとなむことにあらずして。よの農の常なる事なれど。彼放下幻術の雑ど。これを習ふる人も久しうして後ハその熟し。奇異の細工をなしとくべ。目を驚かすを喜ぶよりハ。まして志をとぐる事なれてたやすかるべし

一 後来文才あまりある人ハ。ことに農事に熟すべし。しかるを

らバ往〻此書を増補し。弥民の益ならんハ。予が微誠もあつく世を患ひ農をめぐむの志をとげくむ。尤希ふ所なり。抑此書ハ本邦農書の權輿あり。是偏に愚蒙と楽軒子が。咎をとひ恕をゆるくせをられへ農を憐む誠より出ける。然れバ後代の君子なからんども志を賞し。二翁が労を長く末世に伝つくる功を空しくせざらん事。是又仁者の惻隠なれ一ならんかし

凡例畢

農業全書總目録

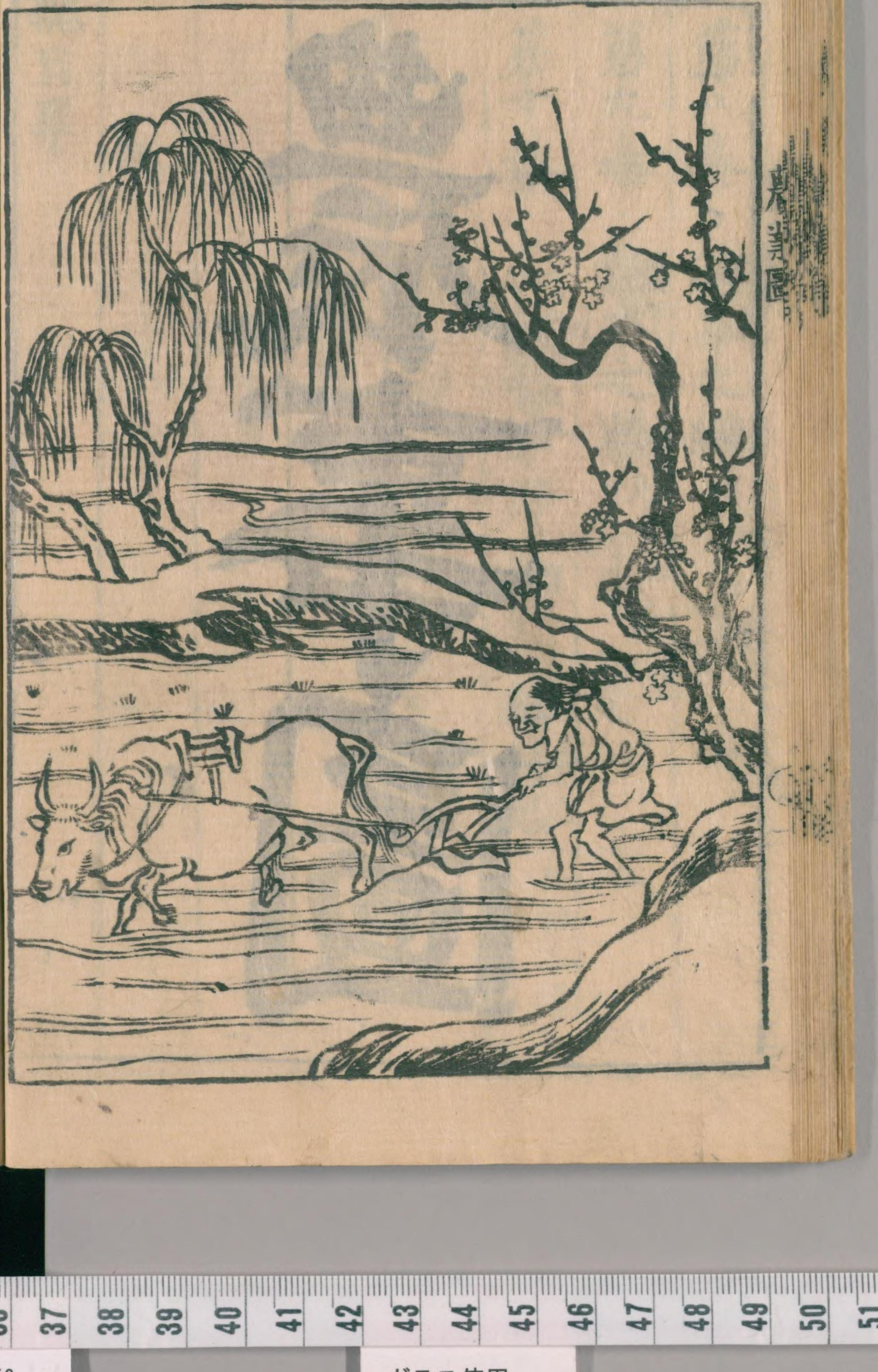
第一巻　農事總論　凡十ケ條
第二巻　五穀之類　凡十九種
第三巻　菜之類　凡十六種
第四巻　菜之類　凡廿三種
第五巻　山野菜之類　凡十八種
第六巻　三草之類　凡十一種
第七巻　四木之類　凡四種

第八巻　菓木之類　凡十七種
第九巻　諸木之類　凡十五種
第十巻　生類養法　凡三種　藥種類　凡廿二種

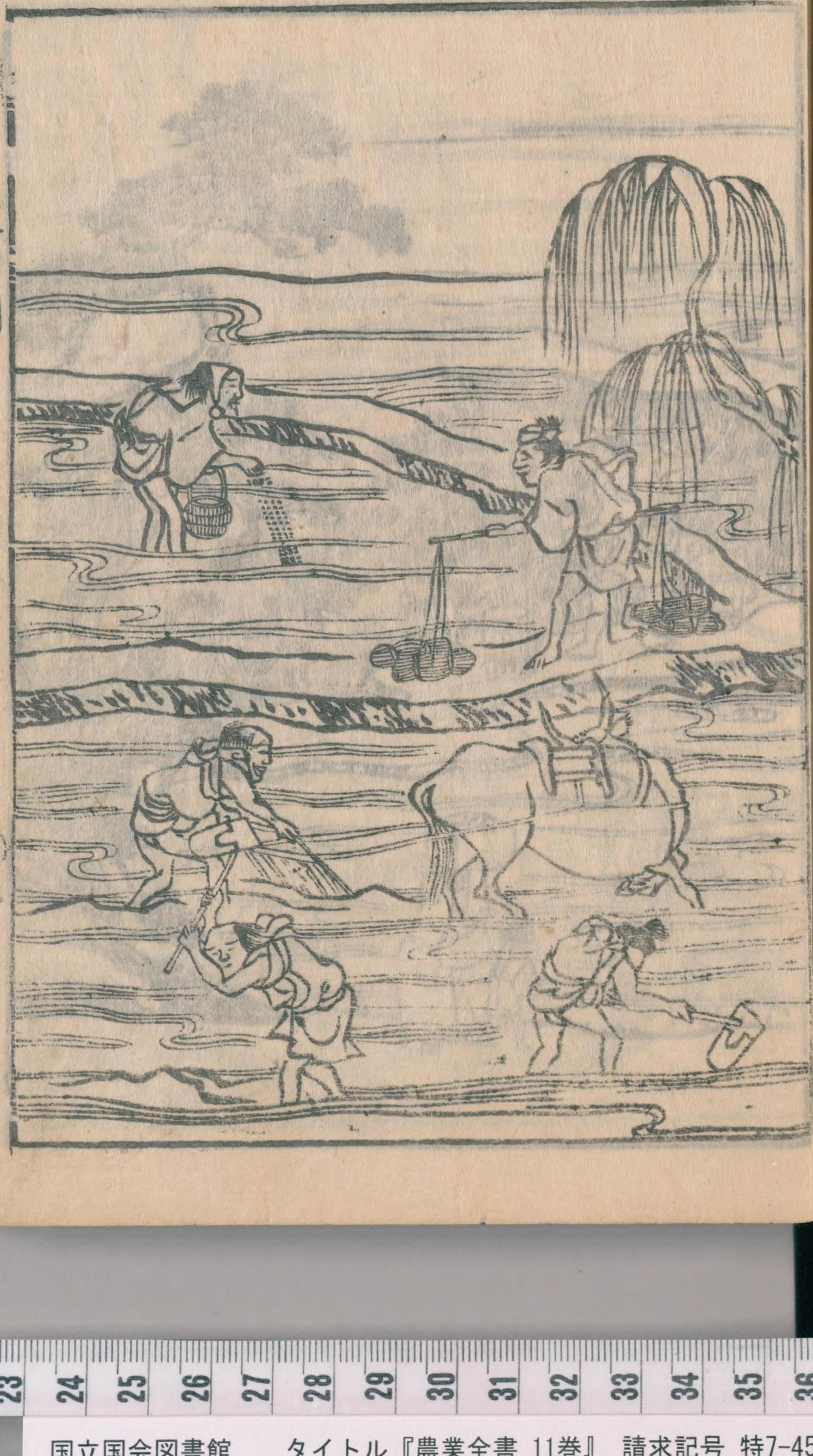
總目畢

農事圖

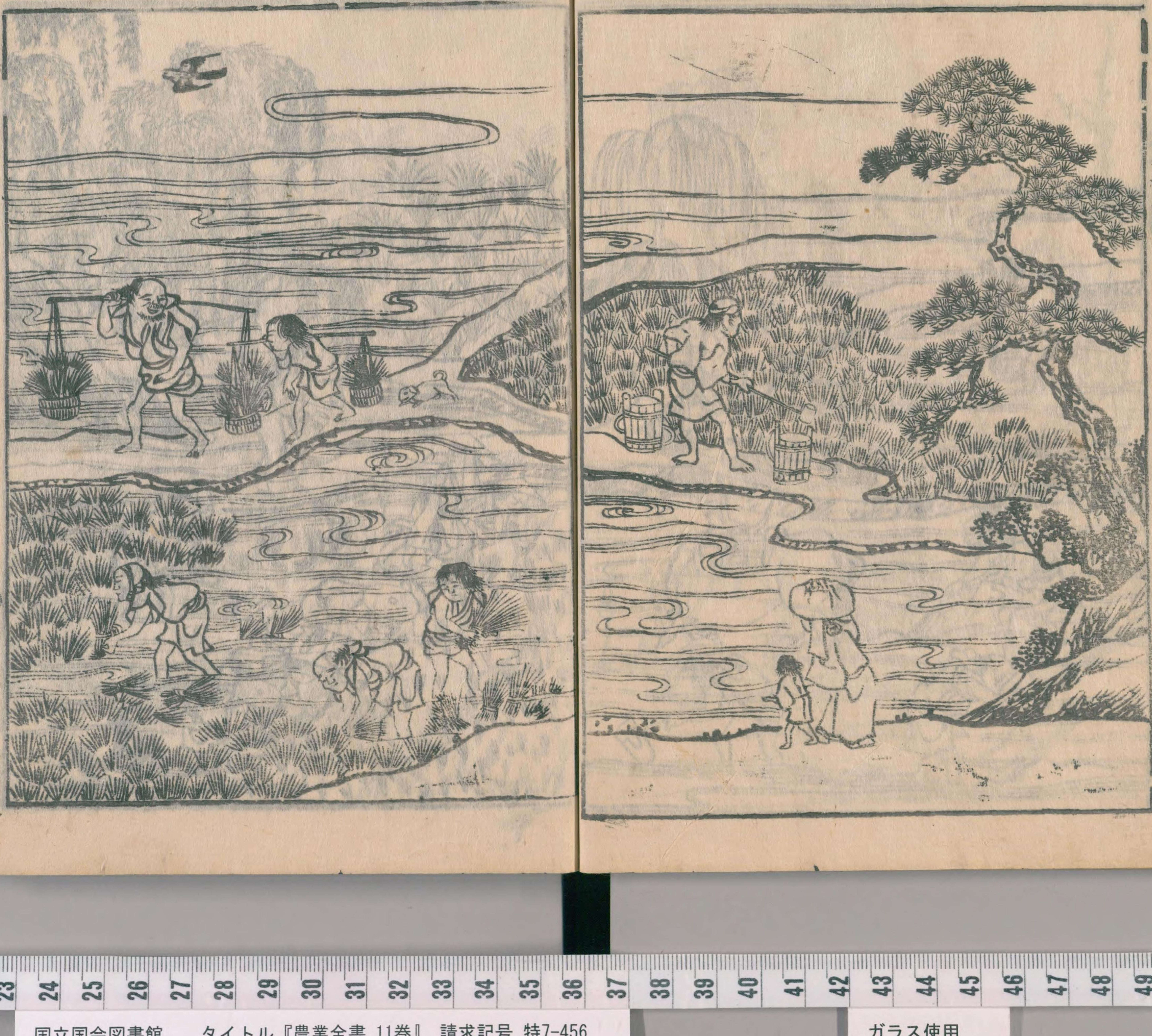
農業圖

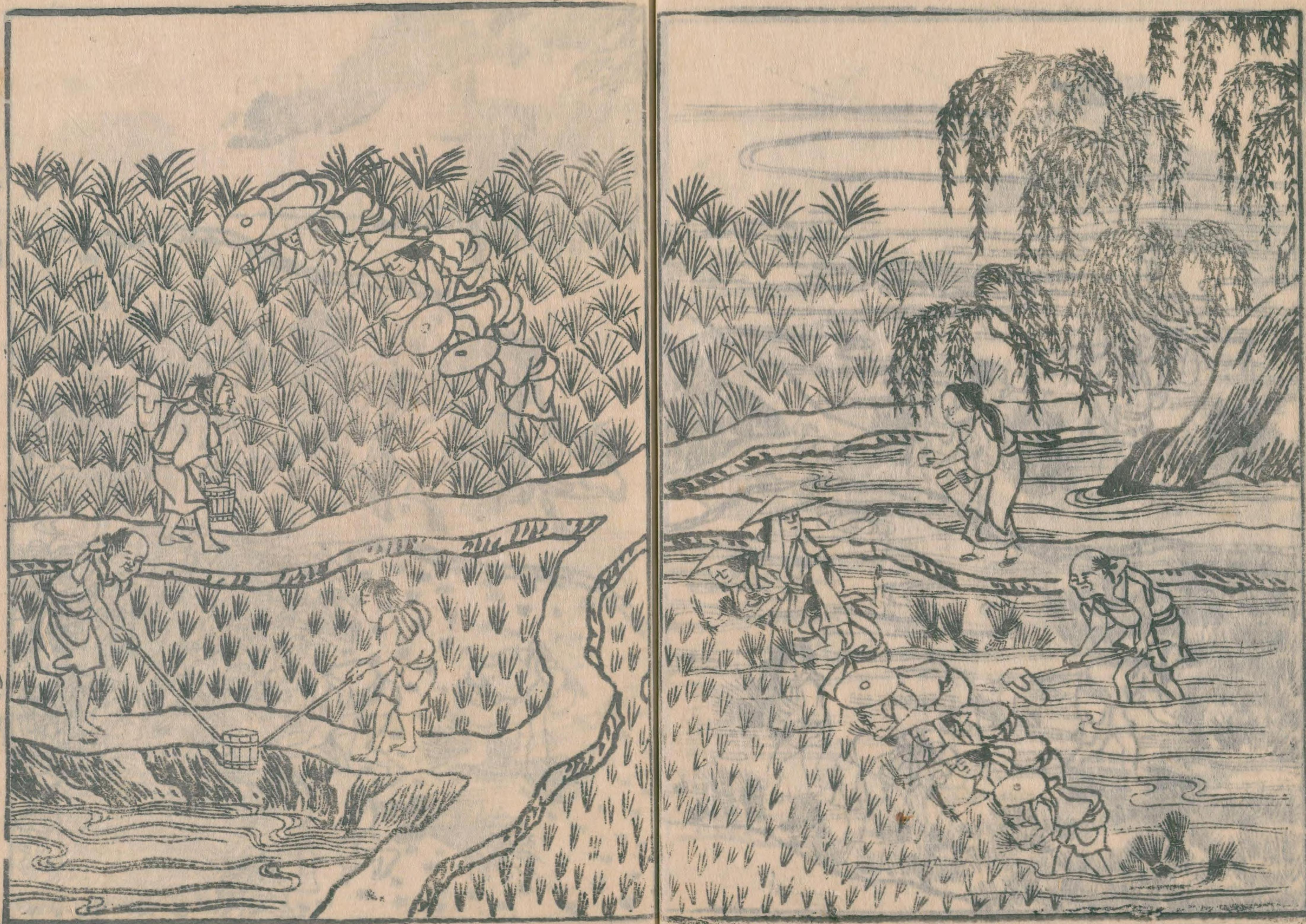


農業圖

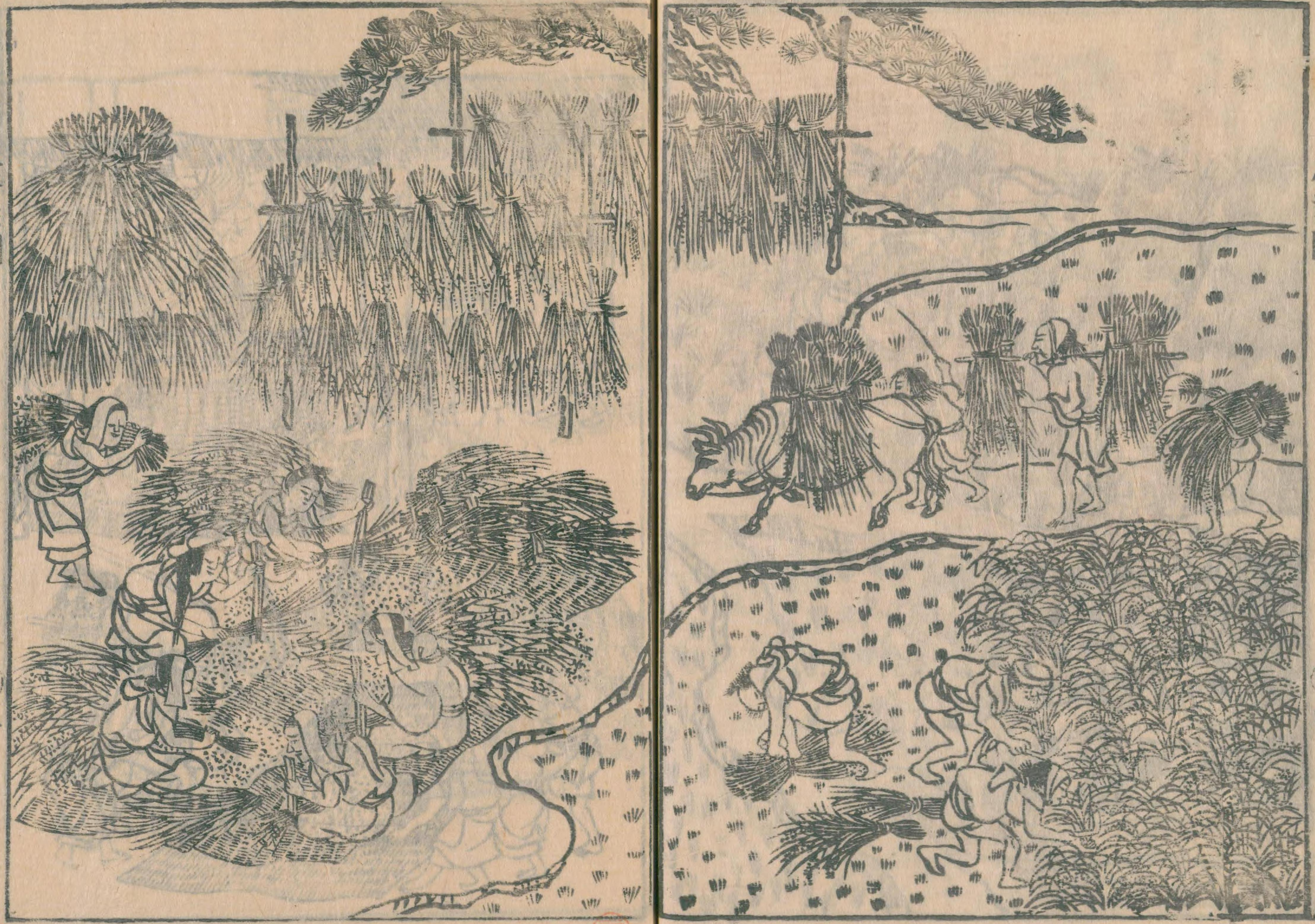


ガラス使用

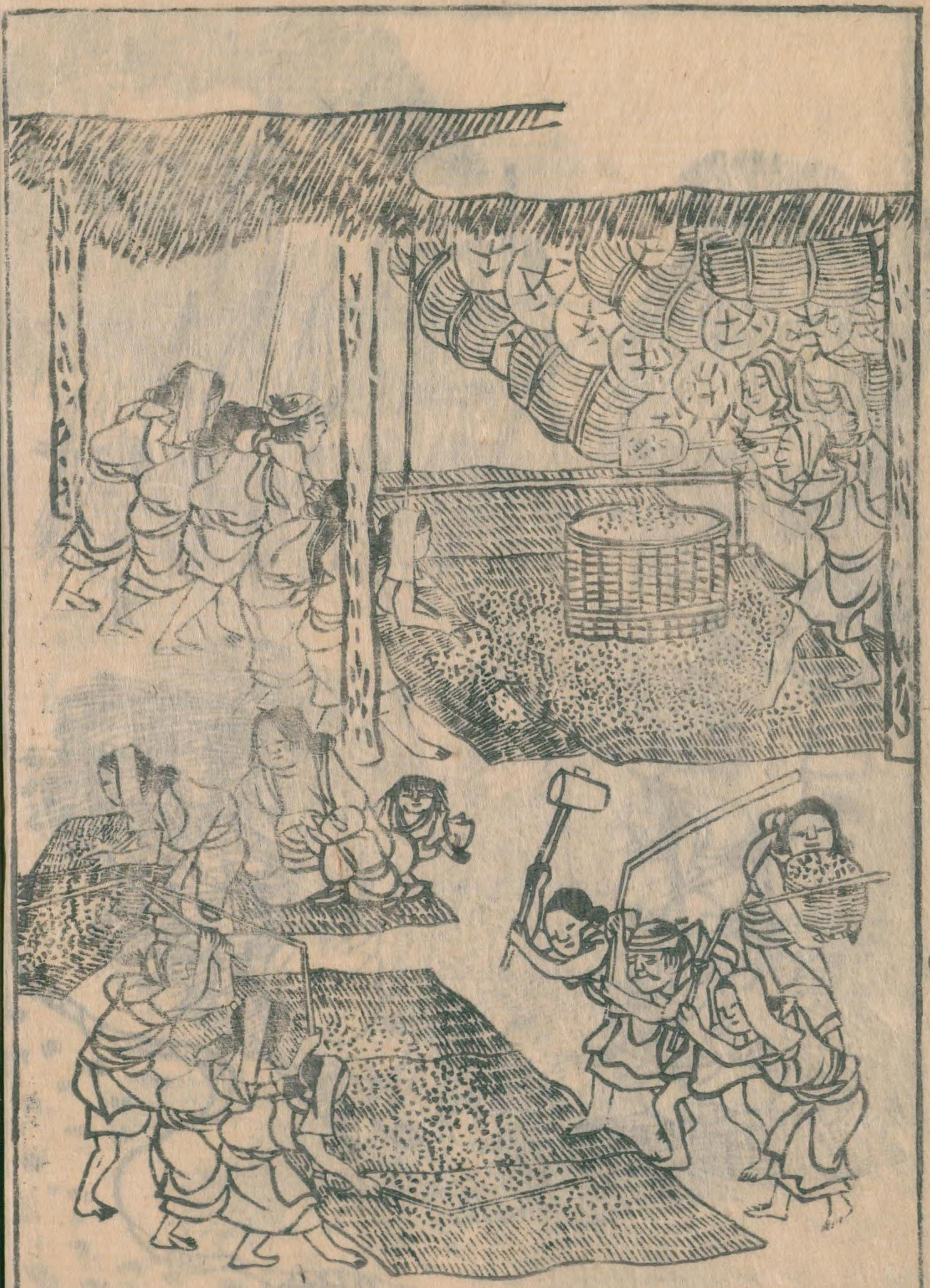


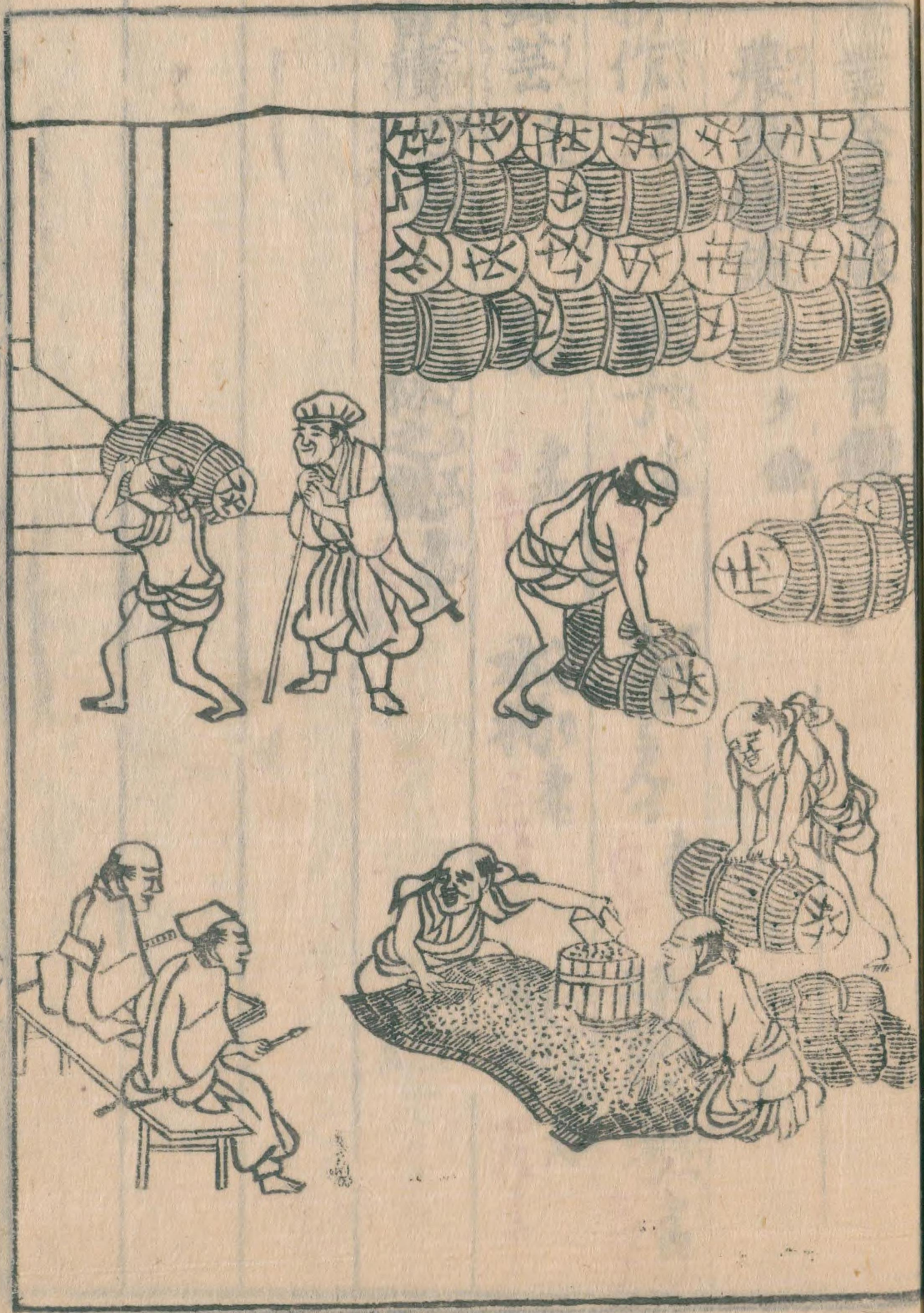


ガラス使用



ガラス使用



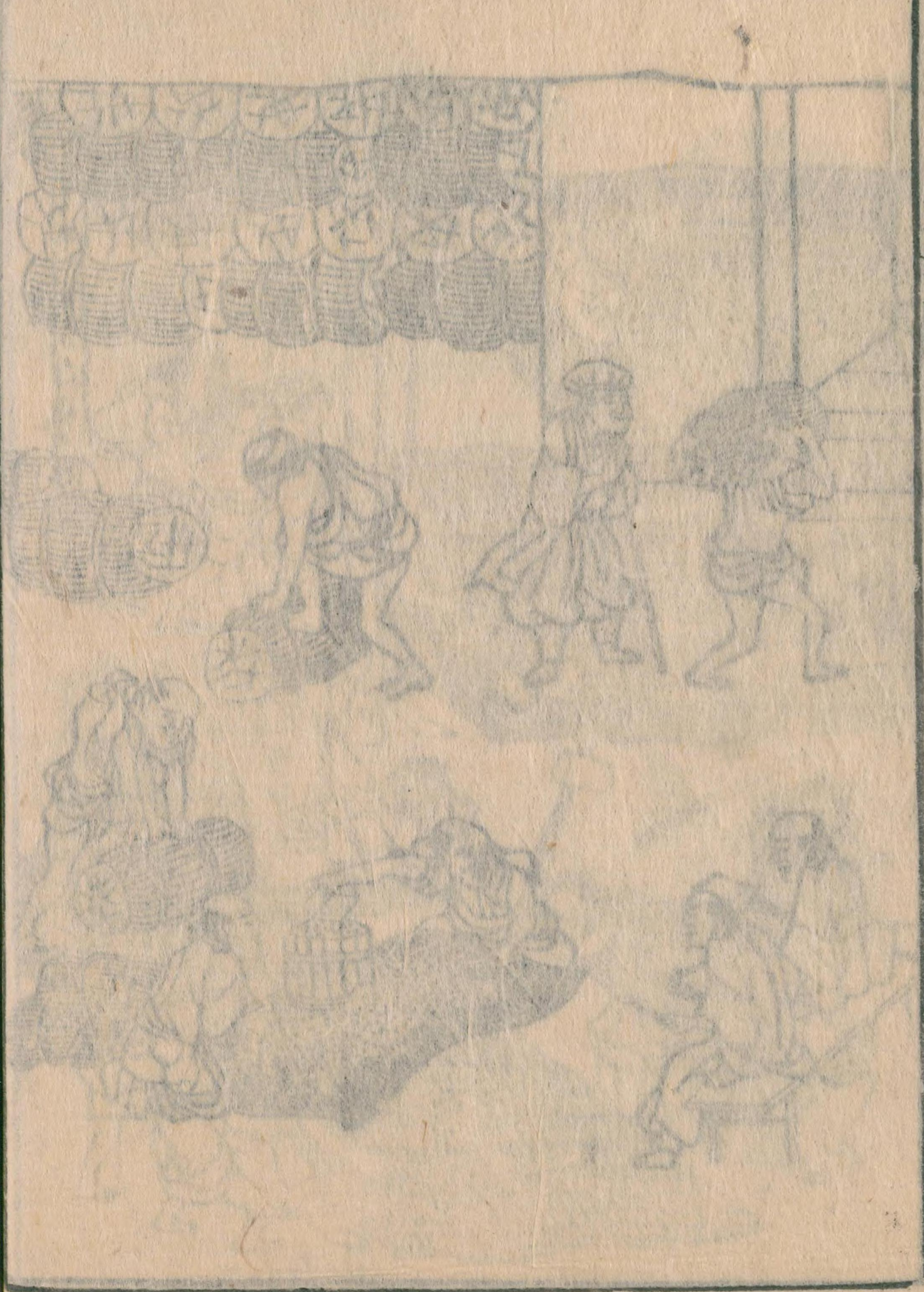


ガラス使用

農業全書巻一目録

農事總論 十ヶ條

耕作 第一 一丁
種子 第二 拾六丁
地をみる 第三 拾九丁
時節を考 第四 弐拾三丁
鋤芸 第五 廿五丁
糞 第六 廿九丁
水利 第七 三拾八丁
穫收 第八 四拾三丁
蓄積 第九 付倹約 四拾四丁
山林之說 第十 五拾八丁



農業全書巻之一

筑州後學　宮崎安貞　編録
　　　　　貝原樂軒　刪補

農事總論

耕作　第一

夫農人耕作の事。其理り至て深し。稼を生ずる物ハ天也。是を養ふものハ地なり。人ハ中にゐて天の氣により。土地の宜きに順ひ。時を以て耕作をつとむ。もし其勤なくハ。天地の生養も遂べからず。さるゆへ上古の聖王よりて。後代賢知の君に至り。天子より三公から大

臣とひきいて東郊の田に出て。みづから農具をとり耕田を耕作し給ふ事あり。是を籍田と云て政の初とし給へり。是古の賢君明王の農業を重んじ給ひし本なれども。猶これに傚て其の農を天下の農人に教へ給ひと云は。天地と共にはじまりて。人より起れる事なるべし。人は生れ来る故に則天然とうけ継て。天下の万物とめぐみやしなひ給へども。心よりそのおかれるを知てなるべきなれば。人世におほく。其功業のさかんなる事かぎりなし。聖人の教たり。生養の為に耕作を以て始とし根本とすべし。是則尭舜の政也。百穀財物も皆耕作より出ずといふ物なし。故に農業の功を事とする所あらば。百は是を成ともに。其理りを深くかんがみて。あはれんで農業を勧めて民を撫する也。又一人耕して十人是を食する五穀のおほけるを。然れども農業を知る人の力を尽してつとむべし。抑耕作には多くの心得あり。先農人たるものは。我身上の分限をよくはかりて田畠を作るべし。若其分際より内ばかりを作り。物よくとも。その分に過るほど一反歩なりとも。又田畠は年々にかへ地をやすめて作るときは。是れも地の精気も。つくりがたき事あるべし。あらゆる物を入れて作るべし。所によりて水田。一

二年も畠となし作れバ。土の氣。轉じてさかんになり。草も生ぜずして虫氣もなく。實のり一倍もある物なり。尤此田を畠にしたる地ハ。物よく生長するものなり。されバよく土ふかく。價高き畠物をうへて。厚利を得べし。さて畠地にして土氣よハりたる時ハ又水田となし稲をつくれバ。是又一二年も土地轉じて大利をうることあるべし。されども是ハ上農夫ならでハ[illegible]轉じかゆれバ陽氣多く。又凝滞すれバ陰氣おほし。又陰陽の理ハ至て深しといへども。耕作して日用の事なれバ其心を付ぬれバさとりやすし。農人これをしるべし。

ハあるべし。しぜんと地の力をやはらぐべしとして耕作を論ずとひろくハ天地の苦労をもといへども利潤をはかるあかし。先土のうるほひたるハ陰なり。乾きたるハ陽なり。ねばりかたまりたるハ陰なり。脆くさくいなるハ陽なり。かろくして柔かなるハ陽なり。重く強くけしく[illegible]ハ陽なり。[illegible]其土の陰陽をしるべし。作物も陰氣の陽氣にまさり勝ざるやうに園圃も陰陽のよく調ふ計を専とすべし。晴て日に耕し。其土白く干たる時かきならし。雨を待てうゆべし。又畠物ハ日と風をまちて中うちし。白く干

て蓄てと。是皆内に陽気をたくはふるがゆへと知る

ば。陰陽和順すると云ものなり。農人よく此ことはりを知

へ。凡耕しうゆるも其ごとくに。陰陽と調て天地の徳をた

すくべし。又耕作は耘耨多あれハ奴僕と牛馬にまで奴僕牛

馬まで善悪のくぐへ物の心も失大きにかゝるまでなれ

ば。皆やすんじとつくものは。心を神ぞわすよりたく仁

愛むつまじく。正直に慈実を与へし。善悪とうち。賞

罰を正しくすべし。己を慎みよくして人とうへば。

下人も又いさゝか苦労とせずしてたゞしむるゆへ其仕

事すゝみゆくつとめて。又穀物生成其節に滞らず。

よく生じよく実のるものなり。是を和気と感召

とも云べし。天地に感應をいたすなり。又古語

にもいへるごとく。一年の計ハ春耕にあり。一日の計

ハ鶏鳴にあるなれバ。未明より起てよく早朝の陽気に

つれて田畠に出て働くべし。又晩の日に仕事を則

前の夜より考へ定めおき。暁におきて天気の晴陰

とくと見はからひ。其日の手くばりを定むべし。静

作りにかぎらぬなれども。尤農時ハ万事を

おしまざれ。軽重と。前後とよく考へあらずべく

とゞこほりをせんとし。事々緩急を考て用

ガラス使用

ひかれさる所へと人すべし。牛引農具にて。糞灰土を掃へり。むろまで耕作の田畠の相応よりも余計おゝかれハ潤。遍く諸にまかせて用べし。牛馬なければ弱くして。農具の数おゝしあれバ農人精力を尽すといへども。仕事乃はかゆかさる物なり。必おのれつゆへとりてゆよき農具を用意し。思ひのまゝにはたらくべし。さる時にいたりて心せわしくして。多くとも手ずからもて。土地乃心もその時をしりける物なり　○　それ又耕しへ。冬至（十一月中）より五十七日目に菖ある時分に。菖蒲の初めぐむを印として耕し始る物なり。菖蒲ハ百草よりも先だちて生ずる物なれバ。是を目当とする也。されど所乃寒暖のめぐられ時いたく見つけん心がけて。すべし。もとより田畠も必一村の内にても。所によりて陽気の遅速ある物なれバ。運気の早くおそく所の暖なるを考へ耕すべし。又春の耕しハ手に尋で労すべく。耕てうき耙にてよくかくべし。いかんとなれバ。春ハ風おほきゆへ乾きてかげろうのまゝとげべし。土かハきたる上ハ。すぐにけく。湿ねくるものなり　○　又秋乃耕しハ。白背を待て労すべき。壟のかはき所白く干たる時かくべし。其ゆへハ秋お田ハ露しげくして。しめりもあれバよく干ざるうちを

まくかけば土かたまりて。性あしゝ。惣じてつねに耕して日よりよくバ。一日二日も日に合せ。其まゝかきこなすべきものなり。鋤て間とをき。日数をふれば土よはく塊の性ぬけ。炎気をうくるによりて甚きらふ事なり。耕さでゐるにハおとれり。又曰、秋の耕しハ深きをよしとし。春夏ハ浅かるべし。又耨てハいかにも再らかにむしりすくかくるゆへ二三べんもいく度もくりかへしきとよくしとするなり。是かきこなすれバ宛して塊なからんがためなり。細かによくかきこなしたる地ハ。うるほひよくたもつゆへ少々の旱にもかはくことなし。苗いとますゝむ。とかく土細かにして

和らげざれバ作り物の行間おかしくとるべし。苗の根あらき土ふへハ思ひあつまで。蓋としもひし変つてあるゆへなり○又中耕ハまへのことく後よくそのあるの草乃あをく生上る事を要し。蓋バ其の肉肥るゝなり○又曰初乃耕しハ深きをよしとす。次ハ漸くすくするなり。され云深さ紙て乃まで。初の耕し深からざれバ土ひ熟せず。深くとくするべくして。生土をうごかせバ毒気上よりく。苗てうへ地いたむものなり。但是ハ悪しときゝと耕するを云なり。熟地とつねに耕をいふなり。すなはち初ハうすくすくときハ。草よく殺し。漸く深くしべく。

ガラス使用

種子を蒔べきおりハ。陸の生土をうごかすべからず。さね生土の毒氣にあたりて生じがたく。さり入かたし

○又日耕のたい時を考つくすとやぶるゝと眼あと
もるゝ其時分とよく見るべし。先まいこやしとけくより。

地の氣始く通じ土やハらぎをる時なり ○又夏
至ハ天氣始て暑し。されども陰氣ハ此時始てきざ
ぞ。此時も又土をうつものなり。又夏至の後九十日。晝
夜ひとし。此時も又天氣和ぞ。凡此ハ此時をぬく肉
と耕せバ一倍にしてみのりと當るもの也これ
を名付て膏澤と云。土ひらけやハらぐ時なり。

給されハ耕してすぐまきそうへき時なり ○又春耕
しハ深くせざれバ。これ陽氣の通ぜざるゆへ必
耕すべし。そうじて陰の氣とおのひ通ず。又老あしき
となり。秋も月ごろ浅く耕すべし ○又冬く強
き土ハ塊となりやすし。其時もおのづから耕すべし。
ひらの土ハ塊となりてまき土て草おほくしるを見て
又耕し小雨の後又耕し。かきこなして塊もなき
やうにしてよく時を待べし。是と強き土と弱きをも
るけわけるく云なり ○又かろき土よハきたハ。春の
花咲く耕し。花おちて又耕し。さひしげくかきならし

とくハ草生じ茂るあひの時又かきならし置とも悪うるきにぬべ牛馬を入て踏すべし。如此すれば。よわき土も性つよくなる物なり ○ 若いまださま黒乃根も通ずとも、うるほひもちぎよ。苗あく耕其塊くだけずとも草も腐て埋まずして。ゆく〱後苗と草と一つ穴より生ひ出て。中うち耘る事をむつかしく。毒もとらず地やせくおるともなり。其和の気通じ暖なりけるはうるほひを含く耕し。草あまく生じて又耕し。塊ハかもよくこなして地ハ。土和してうるほひく草もしげれつまゝく。痩地を

らの田とけるもれけり ○ 又盛夏の暑き時耕せバ陰気もれば。つちぬく土の気洩るものの手甚しくてとなり ○ 又一諺にハ強き土ハ黒土をば正月よりまづよく耕すべしとも云けり ○ 又曰正月陽とけくうるほひをふくみ美田と又河のよどき所を先耕し。二月杏の花のさかりに。白沙泥かろき土乃ひらくを耕すべし。是又一理あるといひけり ○ 又湿田ハ麦蒔前乃ハけるがく。されど水を落し。干田ハ八けるまへき稲かる泥ハ。もと立をんく其水を落し。干田とするし。稗てまろくかぎ。其塊をくだかずしてとさか

湿地ハ深く耕し。下までよく干たる時。雨を得てよくかきこなしたるハ。土よくとけ陽氣を保ち。苗よくさかゆるもの也。是ハ疲れよく干たる故寒気のうすれし。一作よりハ定てひとしほ過して湿田乃水陰氣からける田ハ麦地乃外ハ力の及ぶほどよく干て天陽とかゝり自ら耕をすべし。されバ利おほしとしるべし○又山谷ちかくやせたる深田。或ハ冷水のかゝりひえたる地ハ常の作りやうよくハ稲乃生長せざる所ハともに。土を立て自らくだと落し干田となして山乃草などを入よくして作りぬれバ甚利となる事なり。此等乃土地あるハ必冬を過して作りて利をかんがふべし。冷水乃かゝる所ハ溝を立て水をうけ外をめぐらすべし。日に当りたる水を見てまはしかけべし。畑ハ冷気なる地にハかならず糞しを入ても此陰気とめしさつきにハ稲きるゆゑにとれぬ所なり○又耕をしげくすれバよくへらず。又六月ハ耕をとも七月ハ必耕をすべし○又冬雪のかうつゝろをべ。上をかきならし踏付なくべし。是れりくるひとたてゝ虫も死して。稲よくさかゆるものなり○又田ハ泥の干ざるやうに。冬よ

つよく包ミおくべし。深田乃干されざるハ冬ふかくよりね
ものなり。寒中ハ溝よくほりたてゝ水をかハかせとき
て土を耕すべし　○又犂一。耙六といふことあり。是ハ
一度犂てハ六度かきこなせと云ることなり。常にすく
ごとに深きとあさきとを考へして。かくる事くはしき事
とすべしといへども。此幾度もかき熟しぬるよ。
毒気を入ずゆきバ。土よく和合して。細根よく生じやすき
ゆゑなり。あらかきしたるハ土熟せざる故。苗を
植しく後。苗とりつくといへども。苗の根わかき土よ
痛ミ。土気と思ひ合ずして日痛虫気其外色々の

病を生ずる事有り。此のゆゑによき農人ハ云つたへて
法のごとく。一度耕して土数度までうちかへすべし。底
まで塊なきを論とすべし。苗乃立根が底の細土
と思ひ合ざれバ。ミのりうるハしからず。物として穀子
ハ立根よりも生ずるとしるべし。惣て根の下に塊も
なく。又土もかきやはらげて人糞も根の下に絶
りやうろんのごとくすべし。但又土の性よりてこえげくかくべ
からざるも有るべし。細かなる泥弱やはらかなる泥。
原のごとくあらくすくかへさずハ。さのミこえげくハかく
べしといへども。此等の土ハあらく塊ありとも性をもやはらげとき也。

とする事也。一偏に大主とすべからず。所により時によりて。機転と見ゆべし ○ 又耕すに二つのさまあり。麦を蒔地の外も大かた秋耕に宜し。秋稲を刈おはりて。一日もはやく耕。たとへ何でんもかきとき。白く干すは時々又くる事二三遍し。雪霜にあてゝ置て来春地気和らかなる時日和よく又すきかきこなす事三四へんすれば。其地さやかにかひありて。麦其外為あしといへども時おそくたねを下すべし。秋耕の地は。茎のもとのかれもすくなく枯うち草にさへらるゝ事も万ゝ迄に多し。されども貧にして牛にちから富るものは。秋大麦を蒔る地は。又春耕しくわしからず。大抵春耕は遅くすべし。いかんとなれば。雪霜の寒気はげしき気は。いまだのぞかざるに早く耕せば。陰気と寒気おかひて。どちらにむしの心得あるべくけりく。朝も日高きにあらば、つよく耕すべし。又秋耕の時とうしとするは。炎気いまだ寒らずして。うちに湿気は耕こみ。地中にあらしむる理也。然れども余りに。其苗きらへやすし。秋も天気寒くして霜ある朝すべし日高きと待て耕すべし。早く寒温の気と耕こめば。地中にあらしむべからず ○ 又耙に歯の長きと短くて太

ガラス使用

げきとくを深くよく調(とゝの)へときハ。其宜(そのよろし)きにしたがひて用(もち)ゆべし。其(そ)れおしきづりと用(もちへ)てハ細(こまか)くふかくかきこなし。熟(じゆく)しかれども農書(のうしよ)にいへるハ。墾(がく)本はもとより[illegible]なく。大塊(くれ)乃あるよハ。悪(あく)尾(び)苗(なう)なりとぞ。去ばけづりさつて木(き)の下(した)ハ。うつしきるまわく。あしき塊(つちくれ)のあるハ。たゝ(たてこ)なる苗(なへ)はまゝ立(そだ)ちてもれたとなり。是(これ)田畠(たはた)にくさ(くさ)をさき。塊(つちくれ)なきする所(ところ)ですゞかるをとろ。深(ふか)く耕(たがや)し日(ひ)にあかせ。細(こま)かにふりき。細(こま)土(うち)と糞(こえ)と和(くわ)し熟(じゆく)さるとなすなり。めぐらく地(ち)をこれにしてう田れバ。大(おほ)かた旱(ひでう)にあひても。其苗(なへ)痛(いたま)ず。土(とつく)とちれくせ。さいるんものはれく。全(まつた)く損亡(そんもう)して(して)ミ(ひみ)ぞ

くたちかぜのするハすこしもおそなり。是(これ)にてそのやしなひよくさよろしく作(つく)る物(もの)の性(しやう)にしたがひ。けしきをはかりて。ハベん病(びやう)する。つまさちんハ。物(もの)の邪(じや)気(き)をとゞまれざると同(おな)じ理(ことわり)なり。○又菅(すげ)茅(ちがや)などの生(おひ)ずるやつかある荒(あら)地を初(はじ)めて開(ひら)くにハ。先(まづ)火(ひ)をはなちて踏(ふみ)せ。草(くさ)の根(ね)ともにゆるさせ七月耕(たがや)せバ。草(くさ)の根腐(くさ)り。牛(うし)わざちらしても入(い)りて其(その)土もろし。速(すみや)かなるなり。○又悪田(あくでん)(あしきた)を美田(びでん)(よきた)となさんとせバ。苗糞(なへごえ)を用(もち)ゆべし。なへごへとハ。穀(ぞく)のたねをあつく蒔付(まきつけ)おきてそだてず盛長(せいちやう)したるときすき入(いれ)て糞(こえ)とするを云(いふ)なり。其内(そのうち)緑(ろく)豆(づ)を上(じやう)とす。或(あるひ)ハ小豆(あづき)胡麻(ごま)なども用(もち)ゆ。又六月之(これ)を厚(あつ)く蒔(まき)。

拔象さゝくるゝと犂久へし。殺しよくきうく老よくこは
穀田とすれバ其実も甚多し。濃糞と多く入てうまハ
勝まうとそう ○又曰晩稲乃田ハ。冬と緩く耕すべし。
冬を犂りふくさうずしてかくてさ放ゝ中くさうしとき。
云耕せざ半とちうち不入して犂やとし ○又曰云
乃耕ハ朝晩も宜し。夜ハ秋とりめべし。秋ハ日高て耕
すべし ○又曰犂耕するハ。着るれ未一の仕立すくを
縁乃計るハ。皆耕して後乃すれハ。亨耕よんと自ゟ也。
亨田ハ深く耕し。底の土まぞてすくわくぎ熱すべし。底
ま陽気と蓋ねまバ。作り物よ利潤多きて能ひよし

おほきなるをもとむ。それ分限より。多く田畠を作るものを
貪るハげて是農人乃病なるべし。それよりもすくなきハ、
ひとをやとふものハ。おかし田畠過なるとぬれバ。仮令新作れ
ほをよくきらくも。人力をつくすとも。其法にかなひがたく
く耕し。務るとも必時ならざれバ。也地と皆土地乃力を尽すと
まあくハざるも。皆作る。新作ハ分量より内ゞらして深く耕
しあしくならバ。厚く培ひ利潤多かるべし。 ○又
曰天の時人乃力ハ限ひ。それ／＼に備へ立。新作をよ
く作らぬれバ。其つゞく天の巡ぐも厚くしてまほ
よくすぎるひまきてのわれども。或ハ過多よして天気損

と用ゆるわざなれども。或ハ處によりてつゞきかゝりてしかるべきぞ。内て土と地と。天氣によりてあはせなく。是只似合の事をするなりと。口よりもいひてちかひつる事もすれど大かたなし。古智のうへよりおもひ得たりと。古人の説ありされども其道理をよくしれども。才覚有智なくしては遂にかなはず。利害を分ちていへども。たゞ是をゆるくして。必至の利をとぐるなりがたきもの也。すべて八損撲より其力をつくしても。其術をつくさずしても。なほ用になりて。手と力と勤てなくてハ。其功なしといふ也

○又海濱の所ハ。潮の入干潟などを堤を築て田地となさんとするを不おろそかによくつくし。塩年ふるき所ハ汐の気ぬけてあしからず。能そくりて土手よくつきて。其堤をもつて田とする事も。又おもて小堤をかくる。其内に小溝と堀溝とを田地との高さよし。内の外ちかき堤をつき。其内を田地となすべし。然るにそれハ。其潮気田にしみて稲をそこなふものなれバ。山海と潮海とをよくはかり。此汐気をへらすべし。まづ干潟のうちハ。すこしくばかりなる田に作りて八田の養ともなるもの也。さて此田より蒔て稲を作るべし。其地の潮の気のわけてあしき所ハ。蚕豆又八本によりて稲を作りて。潮の気をぬきて後に稲を作る

べし。されバ大(おほ)かた人力(じんりき)を盡(つく)しても湿(しめり)によりて其(その)しかも沮(そし)大河(じんが)の辺(ほとり)ちかき其の湿気(しつけ)よくいづる地(ち)ハ稗(ひつき)とはわろき沢(つき)の悪(あし)き所(ところ)の稲(いね)と作(つく)りて難(なん)なきこともあるべし。凡(およそ)其国(そのくに)にて稲(いね)を植(おさへ)るより。多(おほ)く田(た)にうへずれバ一倍(いちばい)もまさるといへり。湿(しつ)の気(け)ハ陽(やう)気(き)のある物(もの)なれバ其(その)実(み)よく多(おほ)きなるべし ○ 又山(さん)隙(げん)にハかぎらず。野(の)地(ち)なとに植(きふ)てうつらひしくすハ、是ハ犬(いぬ)とける(?)ちくやふど。其奥(そのおく)迄(まで)とゞうらせし田畠(たはく)とすべし。是(これ)ハ地(ち)気(き)うかゞひくぼのかくあらハれ出(いで)ぬとも、ある時(とき)ハ草(くさ)木(き)れからく根(ね)も深(ふか)く重(おも)くある物(もの)なり。其時(そのとき)を用(もち)ひしきておもる(?)。秋(あき)冬(ふゆ)をふしぬれバ、其(ぞん)雑(ざつ)力も入らば。是(これ)汁(け)も草(くさ)木(き)もあらん(?)とする時ハ陽(やう)気(き)発(はつ)生(せい)の物(もの)なれバよく腐(くさ)りて其(その)地(ぢ)をよく肥(こやす)理(ことはり)也 ○ 又麦(むぎ)茎(くき)ハまたくさりかたし。まづ跡(あと)草(くさ)よりくさらかしおほひたるハ、其(その)草(くさ)よく則(すなはち)糞(こやし)と成(なり)て濃(のう)糞(ふん)を入るゝと同(どう)しんまく。作(つく)りよく肥(こゆ)るも也。されども此(この)時(とき)ハ雖(いへ)どもてハ、ひげ根(ね)多(おほ)くさしてのびるゆへ、つよさ生(う)まずしてハ。すきとさせりづらくしんへの力(ちから)も費(つひえ)るも少(すくな)り。麦乃藁(やハら)うすきるにハ麦ありども。又秋(あき)ハ草(くさ)木(き)のしげりたるをかりてするに。其(その)まゝ火(ひ)をとるべからず。草(くさ)を刈(かり)置(おき)てよく干(ひ)する時(とき)ハ、火(ひ)とハけちらし焼(やけ)くあしきらし。蕎麦(そば)かくしと勝(まさ)る事よりてくりくるまして開(ひらき)ことすべし。草(くさ)木(き)共(とも)にくさらかし土(つち)

やゝもすれバ人手(ひとで)まにいらざるほど茂り。其草ハ根の毒氣(どくき)（毒とハ腐水）ほとりさき物(もの)あるゆへ。苗(なへ)やの根(ね)までもくさらする也。せかしハ又雨露(うろ)雪霜(ゆきしも)をいたむ事などさらへて死(し)するもをそ。ざるゆへ、山野(さんや)の焼(やき)たる薪(まき)も利分(りぶん)ハ他の田にも及ばざるものなり。又芝原(しばはら)をもおこし、沙地(すなぢ)などハやゝしかるあまり荒(あれ)たる所ならバ、馬把(むまぐは)のくまにてはかねどやき付(つけ)て強(つよ)き牛(うし)にてかくべし。されバ草(くさ)の根(ね)きれて人力(じんりき)をたすくるものなり。

○惣(そう)じて農具(のうぐ)をゑらび、それぞれの土地(とち)にしたがひて宜(よろし)きを用(もち)ゆべし。凡農器(のうき)の善悪(よしあし)によつて其功(そのこう)をとる事、甚(はなはだ)遠(とを)きなれども、おろかなる農人(のうにん)ハ大かた其

器(うつは)の費(つひへ)をいとひて、鈍(にぶ)き農具を用ひて所作しさく、日(ひ)ぐらしにいとなむ仕事(しごと)ハ心(こゝろ)をつくせども、骨折(ほねをり)苦労(くらう)しても、はかゆかざる事、一年(いちねん)と積(つも)り、一生(いつしやう)の間(あひだ)をつもりてハ、ことに大なるちがひあるべし。況(いはんや)田地(とち)を多(おほ)く作りあつかふ人(ひと)をや。くはしく其人力(じんりき)を及びがたき所をば、多(おほ)くハ牛馬(うしむま)を養ひ、農具(のうぐ)をよく、あまたよき鋤(すき)鍬(くは)を用ゆべし。されバ古(ふる)き詞(ことば)にも、工(たくみ)其事(そのこと)をよくせんと欲(ほつ)する時ハ、先(まづ)其器(そのうつは)をとくすと見えたり。此左右(さう)の田、牛馬(うしむま)あるハ、とをくまかせざれバ便(びん)なく民(こん)よまうせぬ事多(おほ)かるべし。また其善悪(ぜんあく)をくはしく力(ちから)をわかち、ひとさを用ゆべし

種子（たね）　第二

五穀（ごこく）よりはじめて。万（よろづ）の物（もの）ハ種をゑらぶ事肝要（かんよう）なり。是（これ）生物（せいぶつ）の根源（こんげん）にて。財利（ざいり）其（その）要（えう）ある事（こと）なれバ深く大切（たいせつ）にすべき事なり。作（つく）り物（もの）[illegible]とせざれバ[illegible]て虫気（むしけ）も痛（いたみ）もなく。実（みのり）よくうるはしき[illegible]より稲（いね）よく熟（じゆく）して刈（かり）たる。[illegible]と見（み）ん[illegible]取（と）るべし。[illegible]ハ其（その）穀（こく）[illegible]茎（くき）も[illegible]るしるあり。作（さく）多（おほ）き家（いへ）にハ。刈（かり）様（やう）く後（のち）にハ[illegible]より銘々（めいめい）[illegible]置（おく）べし。又[illegible]の[illegible]ハ。其（その）[illegible]よく秀（ひいで）て色（いろ）よき[illegible]種[illegible]して[illegible]べし

物（もの）[illegible]とおさめ[illegible]蓋（ふた）をしてよく[illegible]湿気（しつけ）[illegible]られざる様（やう）にすべし。土の気（き）[illegible]さざる物（もの）なれバ。[illegible]ありて入（い）れるハ[illegible]あり

○又[illegible]。凡（およそ）よく実（み）のり[illegible]て[illegible]日風（ひかぜ）に[illegible]て[illegible]べきおそれなし。[illegible]も[illegible]るとハ必（かならず）[illegible]ど。かりそめても痛（いたみ）たるたねハ。一旦（いつたん）生（しやう）ずと[illegible]られども。後（のち）よりはやく死（しぬ）る物（もの）なり。[illegible]ゆくしとも[illegible]て多（おほ）く蔵（くら）て[illegible]ハまじく[illegible]くりつきあしく。[illegible]べし

ガラス使用

て潰まづくらりず。物ハしいなの実をびあしくなれバ。ゆうろくの
損多し。念よ吉しくへし ○又々穀乃種子をとりくずし
あげ陽よ乾くしてときぐると隙をとく三日も五日も
合せ種子のうへを踏すべくぞんば。其後蒔ば虫の付る事
なきものなり ○又寒中に雪汁と粟をときぐるそ蒔
ごとおに種子を浸て干置時蒔も虫付ず。雪
ハよ穀乃精となる。雪汁よひたしうゆれバ。虫の喰ざる乃
これしず。日旱にも痛まざるこのことよくさも成りと云ども寒中
に雪をつかよ入日つげ乃雨土用土中にて陰ときに用ひて浸
おし用ゆべし ○畑じくるねと云ふすで伝家乃書に

あしくなるなり。おくよりも雪に浸りてまくハとりよ乃なだ
むそうまで作りんできざる物によくたまるゝ土地に相応すべき種
隣郡他所より求てうゆべし。同じ所の物の中にても。
美悪遥近あれバ。よくしらべて用ゆべし。或ハ彼所
うつくりぬ物しき物も。此所乃土地よハ移て合ざるも有れ
ハおのつからそれハ痛むる事も有也。又其土地風気乃違
てよくして立ざる物あり。此理をしらずして耕
蓋天も有ぬ所も諸人くもと云事なり。其余
尚此れ遠ひを定る陰よりおもはれありとぞ人力に
て転じがたき物ハ名高き所の物よおちのくいだれくれ

ガラス使用

物のよく入。肥しもちひなどの滋味にて。能工夫を用ひハ変化し。其物と為したらんにハ十分よくこそなくとも。其しハなくとも。出来ざる物あり。其中に利分の勝れたる種取て作るべし。五穀の種子も。よろしけれども其子ハ。其親乃気をうけて。形もすぐれよく肥たると同じ理なるなれバ。勝れてよきを種子とすべし。たとへバすぐれたる穀子を得んとするならバしかじ ○又稲麦の厚肥多き一の園にて蒔乃敷ほどなれども。多くハ其土を真しべしむるかくざるゆへなり。おのれよく常にくる事乃主とするなれバ。他人よりもすぐれてよくしぶつきまゆ也 ○又日稲

をよくすて粒おもく敷べし。物によりて日に入て置て。流水にゆりとるも乾し用ゆるもあるべし。從来の家ならず所の或物ハよく実のりたるも浮をも取もあり ○又その実を蒔前より。馬骨をせんじたる汁を以て浸し乾しうゆれバ。作り物実りも良し。其外万の虫病とするもあり。二まゆきよき物と蒸しとりける。或ハ鰯又ハ魚乃あらハしひたし。灰とよりかり合せ蒔くべし。其外ぞきよくゑうるハしき物あり

土地をかんがふる法　第三

田畠を作るに其土地の善悪肥瘠上下を近所やわり。能是

とよくわきまへ、其村郡といへとも上手よりは此早霜の恐あらざれば、心ありて人の力を尽しても利潤を得る事少し。先田は水がゝりのよきを専として、よく長雨ありても其の旱にても渇ず、又洪水の難もすくなく、土性よく地深く。糞しとても不用しても。村里は汚穢の流れよるべく。すゞに自然に出来ても。其上よくて新しく手に入たらずつきて牛引れ[illegible]麦を本郷其在郷の畑を作りてはこゝきしひすくぞ土ハ黄なるぞ又ハ黒土にてもよくしてさゝるるハよてハ土あり。凡ち乃よけるハ必ま黒ぶハ小石まじりの地なり。されバ土乃色青ぐもあるハ上の

と[illegible]として[illegible]あり[illegible]うして[illegible]すて[illegible]みぜろうつきくおききの[illegible]と見んとて。○又地をよく[illegible]多くハ目付[illegible]陰陽を見んとする[illegible]本ハ第一とて色よく見ん。又地乃色[illegible]土の[illegible]ずるともろきと見ん日向より[illegible]し。西南風あり。又ハ地ハ浅深しく[illegible]しめを知るの事を[illegible]里に送[illegible]一きハ位。牛馬乃草飼ぶハ[illegible]まずく。[illegible]とよしハ[illegible]ときべし[illegible]内くる土にも[illegible]といくて。[illegible]よ中下の位ど見ての[illegible]むべし。高原ハ[illegible]の便[illegible]ハ九ハ[illegible]しかんしたり

○[illegible]泉ハ稲よく宜しとくてん[illegible]も[illegible]しく稲ハ[illegible]ハてあり

とかく猶せずして。村里の溝のよごれけがれたる流入て。其所ハ[illegible]ものなり ○ 黒壌ハ麦に宜し。すべて麦の地ハ黒土の性のよき肥るを好む。赤黒土ハ豆に宜しく。豆の地ハ赤土を好む。あるべし。粟黍ハ。黄白土に宜し。○是ハ何土にても性よく肥たるが宜し。とさの育してよくあま[illegible]。大根ハ細和なる沙土に宜し。芋ハ[illegible]き泥柔なる黒けとねひもなり ○又木の類も。ハ松ハ黒土に宜し。桐ハ石土に宜し。椿ハ黒白の土深く肥る土に宜し。竹ハ[illegible]温和れたるやせたき土を好むとぞ

風はげしき所山などハあしく。菜ハ沙白にして湿りけの強きちからある気によし。樹下少陰に宜しと茶経に記しときけり ○又菓樹の類ハ南向深く肥たる地。至りやしき前に宜し。いかにも肥饒の地にて人家ちかき所ハ必其のよしなり ○凡草木ハ人の助となる理あれバ。人気をうけて実をよくなることなり。すべて五穀草木皆それぞれに其土地の[illegible]されバよく其国所の土地よくあひたる物を植立たらんにハ。五穀菓よくみのり多くして不足あるべからず。万の人を助る理。益ある事凡人の稼よりもくだらずやすき理なり。よく

あしかるべし。其わけは一つにして記しがたし ○又曰上土と下土との土ハそれぞれしたがはざる物也（上土の土を下土に変じて下土の土を上にして耕ども）其間一とせ中下の土におのづくハ悪土と肥土と成し。弱土と強土とし堅さと和らかにし埴土と砂土と軽脆くし浅きと深くしかろきと引きむるなどハ漸く人のちからにて変じかゆる事なれバ其土の性をよく見んためには人力よりそれぞれに手入のよしあしすべし。其相応とあるとを第一也。其土地の性は人ハ才知のごとくにてそれぞれの好む地あるものなれバ其のごとき能によく見分べし 茶ハ茶と桑とは一色とはさくべからず。土ハ性しかよくよろしきかなりけれバそれに宜しきあり悪しきあり其かげんによりて植栽もよくしく宜をせんにもうくしえゆるハ是非にあらざるべし ○又地暖く肥て柔らかなるハ極よきもうくらる所はよく湿けれバよくたてものやわらかくふとく出けるはどれは植土に似たる萬の草よく生ゆる地必植土に宜しとするべし（又云植ハ人気によるものなれば植る所地しかその人の気に従ひ盛衰せざる）凡うゑつくる事はくまん成とつろりて知は其一入の功有けり

附録を考 すゝむ

其は時を授けて教へハ書の要典より歳に其撰なるもの多

小正月令。玉燭宝典。月令広義。その外天文の書などに

委しと云へどもこゝに略しぬ。凡一歳のうちには。四季。八節。二十四気を考へて（四季は春夏秋冬。八節は立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至也）其時候によくまし土民よく耕し種る事をとすべけり。季は先をと用て月々に守るべしとぞ。農家は天の内に生れければ其節をと問て。臘月より其の新しと歩むやうにして地の利と人の功とによく潤ふといへども天の時に合ざれば。苦労むなしくして益すくなし。むかし黄帝の世に。山川の勢ひより。寒暖のわかちをなそ。其時にしたがひ時節をある道あれば。一偏に定めがたしされども大抵宣しきは。其所の草木の萌生時を考へ合せ。其上にて心を尽して工夫し時候をもつとあはりて十二ヶ月をのく写しきわり。時候はよく見ちてゝゆきば早すぎたるをもせずとも又時候によく種れば晩くてもよくみのる物あり。物によりて時候におそき内にまくもよしのり。わけてみれば穀く考けるべし。節を続けりといへども先うつくしき敷るすハなほもなれなり。○ みま穀も種の勢をさ生成て気にたちてせずる物なる申へおつきこ手まくへからし。どうとき按多しよりかけきまるさりりあとくやむの時はもとして時よきさくとのいるあばつさき蒸し風雨にあたるきり物とふきてかいかくさうゆきしばし別にてやし。うへ物の陽気を助るゆへよくせは

し過し時よりおくるゝも又ハ其令にかなハざるなり○
又万物の根元を時ならずして気をもよほし発生するゆへ是天の
生ずる時ハ自然とおのづから己にすぜんと本の時に帰る其
にさらんとする時。甚しく塩ひ。順に四季の時よりつくり入
と用れバ。天地の理よくかなふゆへ豊年也。是ハ万に及ハ
ども。おくれ早きも豊年もなく方の難くせまくなく是をのがれず。
秋まての。つもらえしきてハ甘きともいなり。種る所にしゝ人
代くれ。賢なる主賢人武に時を授け。時を下せらしめ。農
る乃時不違ハ。ぶらやうと古よりいへる。文にも
見へたり ○又曰十二ヶ月皆にとものく種ざる時ハなし。

とれくるも其の物の気によるとも。一日の内と云へども節物ハ年よ
り宜し。蒔くる土気をうけて生き返りしば晝より夜ハ陽
気もさかんなれバ也 ○又菜などの苗を植立るときハ夕
かた宜し。ゆる物ハ午にハ宜し。つゐてハ晝くて植れバ後
わかしほ傷むども。藪く又夜気をうけて夜の雨まくよくは
宜しき物なり。ものに雨気曇りたる日植よし。蒔物ハ晴たる日よ
し。又物によりて月の終より月の初めに種る物多し。
実に陰陽の気満かけ。一日一時の違まで目にハさやうに見
へねども万物盛衰あるゆへ草木皆穀物栽ゆハ。穀蒔物ハ
時もまくゆゆるど。又刈る物ハおし生くよくなると

秋ハゆるく刈るべし。但地によりて大風霧雨の天気合ぞうて又運あ世 ○又老人ハつねに暦を見ずして土用八専の二も知其吉凶をよくりりと考へ。風雨寒暑の変あらんてを兼ねよかくべし。必刻のかわりよハ晴天もあるうちにかわりの細かなれバ朝夕つとめしハよくバりと閨の中よくよくおもんぱかり其後にかかりの時気をものがらで見え候出日ハよくすべし ○ 作事とあまねく家事の工夫ハ農人よく頭しねども。老人ハより心をそもそも見ゆべし。天気の考へと諫かれしねれバ。一時の風雨により。耕耨の労を空しくする事まゝあり。然れども其土地の陽気の強弱。陰気の寒温により。農業を運すならバ

すくれし。すくまざれバ移りかはるし。日月乃天によめぐりてそ。聊もろうろも常たゆまざるほどと閑遊として。寸陰をとおろべし。すべて耕作稼穡の業ハ道にて天乃時を知り福を奪ふいのちなれバ。息慢して舒も日にとくとく行く記。大切なるする光陰をとくとまるべし。と日乃昇又行きをはりとがらますかく備て息りかうれ。不動をする乱すまく農業といらぬめバその一ころ遠つるとかく天然めぐにしれハ河るく。田畠も痩おれ年と月とうさね。貧いやまし。飢寒を乃ちまへにせまりぱく八父子夫婦もちもれぐにかけう。終よ人づからの身とおちぶれ。免苦若名しても時あるし。

ガラス使用

然れバ心ある農民ハ必此のうまへと思ひくわうじめよせぐべし。天乃時をまちて一寸の光陰をも大切にをしみて、農業に身を投ちて心を用る事をはげまして[illegible]たるべけれ

耨芸（くさぎる）第五

すべて種子を蒔、苗をうへてハ、農人のつとめハ田畠の草をさりて、其根を絶べし。根葉とく苗にはびこるはあまた。小草ハ苗にまぎれ[illegible]、暇の時もさしおかず、殊にはびこりて土地の気をうばひ竊むゆへ、苗を妨るゝかぎりなし。中ゆるくりかへすべし。然れバ草ハ主人のごとくもとより其所に有来る物也。苗ハ客人のごとく、わきより入来る物なれバ、大かたの力を用てハ其のぞきさりがたし。其上よく〳〵ハ生ちかぬるにて、苗を押て地の草へやむときハ、性情よのつくしみなれバ、かくのごとくして五穀を害する草ハ、はびこりすみやかなるねがひなり。故に上の農人ハ草のいまだ目に見えざるに中うちし芸る。中の農人ハ見えて後芸る。見えても芸らざるを下の農人とす。是土地の罪人なり。○又畠物ハ苗生じて[illegible]る時中打するをいそぐ也。苗一二寸[illegible]時[illegible]下にひしとおるとばかりさあまり芸りめぐりたる事を畠なれバ、苗の根の下に踏こと。

畠なれバ畦乃ゆるき所に掘げとをさらわくぼうへ物の根の
きハ枯れしせ遠くたとおかひ。又其上よりも。糞とうくれバ。
枯るる草よ腐りつゞわくだちよく肥るも此けり。是と録とふ
けり。言ら転ぜすハぐさぎ乙。子よおゆとて苗乃根よ枯る
るよりやと、おかひさくるけり　○又穀を其外よ中うちを
ろしく小鋤とうしとするとよく。耕く杷よ此く細代ち
つし。鍬よういよきう犬鋤よ直てかしずむねよう時
よハよるるすかれども浅く中うちするすハよろね
るすかり。只草よう根と土よよろうく苗の根よあしく
あるべし。されど小鋤ハ草よとゆるのぞのどと地熟しして穀

多く糠うしく。其災るゝまし。あく中うちするて
と十遍すれども八弊と切るとよく枯すく実多きる事を
○又同じ夏の中うちハ地を肥し。夏ハ早よ草を削殺し中う
をとらぬべし。是一所乃けりなり　○又夏ハ炎暑乃温
気ぬある時中うちすべからず。夏といへども六月かは七月
迄温よ湯るもくるしからバけれぞ中うちすべし
わば地くまりて苗痛むものなり。夏ハ熱気そら
日とつくるきれしば其虫を生じ多るときハあるね。
きつきよあるらど　○又夏ハ熱気つよくして底ま
でいりたる時中うち源もされバ苗痛むるなり　○又

粟黍稗の耘ハ苗乃いまだ畦のひろき所ぞ、ならしかろきる時ぞや中うち一遍し。又五七日して、鋤耨にてやゝふかくすべし。其後又一遍ばかり三遍うちて、人の手間あるさもれハやむべし。但力ある者ハ其後も一遍うちくらさうがよし。但胡麻と大豆ハ二遍うちてやむべし ○ 又中うちハ始乃第一遍ハ深き程好まし。さうくとかろくうち、二遍めハ深くすべし。三遍めよりハ次第に浅きがよし。なんとなれバ初め一遍ハまだ苗乃めぐりんともなるを削殺し、二遍めハ深くうちすれバ土へ和らげ主根つよくなりて、さきにたへ乃底の根をもうちさるゝゆゑ根底乃気よくめぐりてあげするべし。三遍乃時ハ、つよき根やうやくのびるゆへ、深く強くうてバ苗いたむる故り。殊に根おれめ苗ぜんぐよ浅くうつべき處中うちする故、ずゝふ干る細根乃底へ入てくうへ物を細根もよく思ひ合くさゝてのびるんやをもるぬも數あけの

○ 諺にも云、耘をとること八遍すれバ、米と糠粃とをして田畠とかれ穀實中うちすれバ、大なる捨物にすべき。耘などすくして飢死と云ふなり ○ 又農具も鍬、熊手よりどの類、大小さまぐ多し。時と土地に随て浅深へ用ゆべし。古ハ雨より前田の中をも耘すくうらく

きゝてきまするといへども。遠代ハ大かたよくよくそなり
さはざり。茎葉をめぐらさる。麦の根葉をもめぐらさる
ときまされりとせるなり ○ 又田畠の畔にも其所ありて
あとりにゐるよおもき立とくべからず。わくりにやまさるへぬれ
ば土の気とうばひぬすみて目にも見へしぬ害をなす
甚し。故てさるゆる物ハ。其おくりれ田畠の気多すぐる
故てよる物あれバなり ○ 又たとへ五穀ハ五根に精
よりすぐる物あれバ実のりとおかされ。物ハ五根のさきれ
とうくやしめべし。糞し。五根のさきにてよくめぐる心
得べし。又田を芸る時ハよくよく浮根浮葉とバよくさ

ゐべし。是に精とめいふとまぎきなり ○ みず
うちハ土あたゝまる時。然るべからず。日と風とにあたりて土
白く干る時一遍うちたるハ。土あたゝまりて日を時々に遍
もちたるに勝るもなり。又泥ハかわきたるにうちたるよし。
かきくずけバ其気さらんなり。尤晴ぐさまる時分よくよく
瘠るものなり。是ゆへ中うちをさいくせんハ上の日に
あたゝまる田土を入りて物の根に陽気を加へ補上なる
ゆハさるる。田土をいくぜんくに根にやせおかハひらかれひく
会をねれバ。かへ物さらゆへるを甚し。是て又根の土をとけれバ
旱にも痛もを風雨にもたゝきれざるて。一方に中うち。芸

ガラス使用

ならんおほくてハかはりがたし。ひとをとゞめがたく一きはなくハく熟にすべし。但是も其地によりて物によりてかはりあれバどもハあるべし。小麦などハ其地をひきしむる事此むぎの類に、後まで其かはりつけれバ、又ハ中うちもちらくハしくすぐく。跡をつて實つきたるハね。大豆等の類ハ又ハ地をひらきかろく。ちらしれく、弱き地ハ中うちハ、ちらせハよく性あしき地ハよりくわしくするもそれがる物ありてハ、肥しかたし。強き地ハ、人糞緒を作りてハ、中うちをするも幾たびにかぎるべからず　○中うちれ造理にておもふに、蓋五穀の氣をとめがたし。天陽と根の下に通じ土地とてんじあらたむべし。其苗え葉を栄へ稔多し

糞　第六

田畠に膏腴あり。土に肥磽あり。磽くやせたる地も糞を用ゆれバ、老たる土も、瘠たる瘠田を変じて良田となし。瘠地を肥地となすも此ハ、是糞なりやしなひにあらざれバあるべからず。いかなる人も、よくまく田地あつまるゆへ、年々地をかへ、或一二三年を地と見め、やすめて、作らずしておかざれバ糞書にとらそうにてとりて、よく実のらず。これ私のやまなひもしらず。と世ハ人多く、且飲食乃心へかぎりあるぞゆへ、農よ也いとへとくるハ云に及ばず。桑

ガラス使用

て年中(ねんぢう)作(づく)りうちつゞきあらもかくのごとくすれバ地(ぢ)の力(ちから)衰(おとろ)へよりよく。栄生(えいやう)の気(き)を留(とゞむ)るきゆへ。糞壌(うんやう)をよく用(もち)ひ。地力(ちりき)を助(たすけ)く常(つね)にさりんにせずバ。いりんだ。秋(あき)の収(おさめ)多(おほ)くやうるをしや。是(これ)よりよく。糞壌(うんやう)とあはめたくハゆたハうらとをこすべし。凡(およそ)農家(のうか)。沃壌(こゑつち)堆場(おきどころ)を広(ひろ)くあくた掃(わら)とし。稀(まれ)草(くさ)なれよけれども土(つち)に埋(うづ)むべくことおしゆるやとたりつきぬど。一所(ひとところ)に集(あつめ)とくさ。毎日(まいにち)牛(うし)ろよえ、つ土(つち)踏(ふま)ひこませかしいさうく踏(ふま)する時(とき)。ことさり糞屋(ふんや)に移(うつ)し置(おく)べし　農人(のうにん)ハ糞(ふん)を限(かぎ)りよそくうの糞屋(ふんや)を個(こ)數(すう)べし。糞壌(ふんやう)多(おほ)くしそにはど多(おほ)く作(つく)るべし　○ 糞(ふん)田(た)の寒(さむ)きハ（?）せぎハ鍬(くは)くし。糞(こえ)と溶(と)し鋤(すき)く打(うち)さハ牛(うし)

ひきゝるれ穀(おか)多(おほ)きとの八ボ山(やま)のごとく積(つみ)なすべし。其上(そのうへ)なりて八。一疋(ひき)の牛(うし)も一年(ねん)に糞(ふん)大(おほ)くて。田地(でんち)大(おほ)いに肥(こや)すハ。らく比すべし。是(これ)先(まづ)農家(のうか)の必(かならず)つとむべき物(もの)なり　○又田畠(でんばく)を肥(こや)す糞(ごゑ)乃品(しな)あり。先(まづ)苗糞(なへごゑ)。草糞(くさごゑ)。泥糞(どろごゑ)。苗糞と云ハ。菉豆(ろくとう)をよしとす。小豆(あづき)。胡麻(ごま)をも次(そのつぎ)とし。大豆(だいづ)。蚕豆(そらまめ)もよし。苗ハ五六月田(た)に厚(あつ)く蒔(まき)ちらし。さかへたるころ七八月犂(すき)かへし殺(ころ)しとさく。其(その)ころ穀田(こくでん)とも云ふ時(とき)ハ。二つの物(もの)をもろく。流糞(のううん)と云(いふ)事(こと)ハ(?)ほどよく務(まさ)れり　是ハ（?）糞田をやすしく。そうの蚕(かいこ)の糞(ふん)ハ。（?）田畠(でんばく)を（?）　○又草(くさ)糞(ごゑ)と云ハ（?）

ぞうきんくる時分たをし。屋敷乃内。或ハくぼ田にそも。日向乃所よりハ猶も多くはえかさね。西おかひをうくし。むせ腐らせ爛らせ。とりにきりかへし。便溺をうちひらし。日に當乾し。又ハ乾く。作物を植る時の苗で置よしてこれを直し。むぎ稈よ合せて時とし。是むねどと云漿を云に用て一入よし。妙かハりよくきくなりなり　○又火糞と云ハ。おろ物とつとさんわをくひしやきたうし。其所をてきて土よ合を麦を蒔て實あれ物に用ひて虫気もせずそ。もしあらバ多くしてめとき。深田泥田よ入てもよ

よし。小麦を蒔。肥糞にしてよくなびてよし。然乃細末うゆるよハ。必山やさ土を用ゆべし。取る所濕氣なきハなほよし。細よ山土糞ハ物のでくともとやせなりなり　○又庭乃一すみの便よき所に。清淨をとつき。糞屋を作り。湯釜をぬりすへ。毎日掃除の塵あくた。其外わろ物を。かきあつめて。又ハあてにて作るれおるそハ。常に草よなり何もよくも見れ及ひよ末つもくかうしとき。其下よ火の通るよく焼ねれバ。熱湯乃さゆりるをもれく其方乃用とせよし。其灰焦土もりて泥乃なき糞とするべし。沐浴の湯。洗濯の濁

水肥とば皆糞溺と合せてく肥で多となすべし　○惣じて作り物に糞しと用ひても。時なくぬ。うるおひとがざれば。尤陽とく吹陽気のミにして。土地乾きる。よとりさるゝでき。時しやうにがまゝく。うでゝてれより入も匹くうる物なり。されバ水肥を多く施へきさ時はくさを用ひ陰気にやはらげすへし。為糞焼糞乃二名ハ。専一陰陽を調ふためにも専ら用ゆにしべし。其外すり糞ゆる人ハ陰気うるほひの害よあり。又其泥のことハ。陽気のかなりときるべし　○　又泥糞と云ハ池河海うもの底のほて泥と上げ。よくく乾しそまゝ糞屋に入ときハ。しく行とつて。人糞尿ちらぐ人の糞。又ハ新しく熱気乃ほとまさずと合せ用れバ。ことさらしつよし。少しもを用れば菜の根。そのかこしそれまくせ乃ほくことれく。吹込れ不にて用ゆべし。物れ醉しろ氣と解し。物をさハやうれし。多りに用ひて非なさて忽なり

○　又ゐるよ糞というハ。山野の芦さ苗やよとかゞろをいひより。ききもえかり。是を入ゆく牛ちにふまゝせをさ。或ハつもうさねて腐らし。又ハそのまゝ田畠よ多く入まごろかうようくさく物なれバ。そのまゝ田畠れれたやつくきはらくきつく。後まざく泥うこせなり。陽気あおまそのさうる

ひゆる時ハ物ちゞまれバ。其芝草陽気をふくミ。則五穀作物の陽気を助けてよくさかゆる理也　○此外腐らし屎まてたる物。又ハけがらハしき物乃類。行水の灰汁よりむさきまで。糞桶にためおきて。よく腐らして用ゆべし。又糞水を入るゝ桶と用ゆべし。かめ乃類ハ陰気ありて。入置糞水すくなけれバきくる事あり○又糞水ハ。和らかに茶けくされバ弱き物にハ。細苗乃中にてハうくべし。常に苗中にハ濃き糞をうくれバ。糞の気付かれく益なし。晴天ハ時をようとす　○又糞を穀田に用るハ。先溝を研しる時うちひろうて手付れバ。おのづから時ハ濃糞をうけて早滲なり　○又魚鳥畜物の類くさりたるを糞壷にしてよくきくもの也。其外飯のあまりくさりたる物ハ。寒さ時過るまでにくさらしてあらバ。木の桶に肉を一把ほどとく。かゝれバ時の悪くするものなり　○其外にて糞桶どバ畑乃もしくハ桶よくおかひして置べし。寒向の所糞桶ハ内までに日にあてゝ入べき事を　○又湿気ひやけ気。ハつよく然冷気ある田。又ハ山田乃日とほくる所などハ。其しめ付るへきれしバ蛎蛤の類乃貝灰を底にやき。糞汁に合せ用ゆれバなるほどよし　○又

山田ハ泥水に痛む事あり。其所ハ冷てあり。日乃奥なるされ浮れ。井での溝を深く堀て。其泥水をながく日にあてゝ温つて後其田に入れバ冷痛をせぬものなり。其溝乃はたに生る草木をもかりのけて溝乃日あたりよくすべし。よく日に當りて緩まりてある泥ハ糞ともなるものなり　○　又泥を家乃内に溜置百日もをきぬれバ能とかるなり　○　又土も屋乃内に運び入て百日も雨露にあてざれバ糞となるものなり　○　又上糞といふハ。胡麻やせうぶら乃油糟。木綿ざねの油粕又ハ干鰯鯨糟。同骨れ油粕人糞あれハ其でかの及バ残ハ灰をよし灰ハ糞に入合せてくさらかしときそれくれ土地と作りにようて用ゆべし。黒土赤土乃類ハ油糟と号にすべし。沙地ハ干鰯よし。湿気塩つよくあるにハ。木綿さね乃油糟よし。上糞乃分ハ田畠にこざるすべて其土乃物よ相てもよくきく物なり。されども土乃性によりてかづれ用捨あるべし。其験をさし引して用ゆべし　○　それ黒土ハくきくきく肥たるハ。信に美土なり。然れども青き練ることても堀つからさうの黒なり。是ハ湿気含みるがよくつくきハやくれすべし。瘠土ハ。信に悪し。然れども糞を用ひてよく其入とよく壌ハ。苗をするて其手つよし。土

乃性の美悪色々の品多ありといへども、皆其術を尽し、其土地によく合ふやうにと用ゆれば、必ずよく利あるべし。是を田家には糞薬といへり。誠にさもあるべしと用ゆれば、医術によく似たり。土地に虚実冷熱あり。糞に補瀉温涼あり。土の性わろくやせたるには、鰯、油糟、人糞など、地を強くする物を用ゆべし。又地の[illegible]堅くしてつよく泥過ぐる土には、却て其土をかるくする物を用ゆべし。河藻など又は溝泥などを多く手すきまぜて入べし。又白砂を入ても土ふれはよろし。過ぐる時は毒となるべし　○又湿気底冷の地は、灰や焼糞の類を入て温むべし　○又南向

ハ日当の所なれども、又ころあひ多く土乾きて湯気たちる所には、人の糞を用ゆれば炎気を助くべし　○又凡そ糞穢と沃へきものも、其性と合はずして却て害あるもの多し。湿気にあてゝも日向なれば、雨中に糞屋を作り、軒を深くして内を掘凹め、敷石或は石をたゝみ、灰糞の類を入置き、一方には桶をいけ、汁糞をためおき、相応に用ゆるせくつよべし。喩ば、遠近の方より物を捨て集めてハ、へきそくそれぞれ用に随ひ、肩を治むべく、老農も、又泥土ちりあくた一切の物、糞を集めとき、それぞれ地味よく溜ひ、是を用ひれば、其糞多くかくて農民の

ガラス使用

糞屎を大切にする事稼穡と同じく是ハ殊に稲粱
をはらむべし。然して富を得る事なれバ五穀
の多少ハ則其糞を畜ふるの手立にあることなるべし ○
又古語にも上農ハ糞を惜むる。黄金を惜しむ
がごとしといへり ○又池糠郷打などの糞を好へ置
てやしなへバ雑草と合せ和して用ゆれバこやしとなる。お
ほきに物を作りて上糞とかはりなしと用ひてもよし。
利を得る事速かなり。田にも畑にも作りて。植
をはじめ雑草雑穀とうにも便ち下糞する物。
又ハ田畠ニ多く入る分量より多くてもよしハおほきなり

てあつかひよくしてやるに大切なる事也○糞汁を直にかくる
と用ゆるハ悪しく。造作まけして利潤なきゆへ多く
ハ先手を入て雑糞を多く畜へ置き。上糞をおく
合せて用ゆべし。是則医者の人参や甘草など
ハ諸薬をおし加へて他の薬性を引立ると皆くるに同
○又糞も薬剤と同じ事。一色づゝハきゝかぬ
物なり。多く寄合せよく熟して用ゆる事。是肝要なり。
糞ハうぢありて新しきハよくきくといへどもねばりつよくして毒
熟もとりが減をよく覚えてよく熟したる時用ひバ其毒
しるし多し。然るを古きハ経久しく熟しすぎて陽気のぬ

けころハ耕てよくかしくさるべし ○又田畠の糞をつくるに。喩へバ和をあゆるでこしらゆるくのてやよくさうひあハざれバ味ひ調ハぬものなりてし。もしてふくゞく。一と糞しよく交し。むし〳〵あつく足ひ合ざれできてかく。或ハ蒸気それ病と生ずるあるまでやみくげんおしくむしまゞりて。又ハ地らしくへのあくさようむすみてを多し。総てのゆへに土地ハ深く耕が利ハ多くあれども。糞れおゝきを耐すくく。疎れバ土を深く起し耕をする。和おのその細ハ多くしてあへのおさと同じんなり。これしふれ根とよくよく見て糞をほさ

しひさ。彼良医の薬を用る様とよく合点して。農業をはげしめたらんハ。目前に利潤をゆへんする第也。うるべし。およそ医者も先薬種を吟味し。大切にておさめおきそれぞれの用と待ごとくつかふがごとく。農民は遠慮をも用ひく糞しぬひへくあしの所物によ土地より時分を考へ宜きに随ひく用ひまず揃ものの農よおゝくハ備て我食の内のをとえゞをさに。かもうでひのぞでしず。是政士民郷勝のさざちかさにもおのかいやしきうくりんれバ。ほどなくおふせいこあくそうぬめうかんくハ。稼きくいやしめれしむべけれども。大数

の言のごとく。磽悪の土地を忽に変じて則肥饒の地となし。勝れて多く収めらるゝ事目前なれば。天地化育の功を手の下に助け。百穀を世に充しめ。万民の生命を厚くする事。農業の内なれども。ことに糞は糞壌を調むる事を肝要とす。されバ農業ハ此理りを深く思ひ。心を留め眼を付べく慎んでよくこゝろをとゞめざらんや（是糞壌目前に天地の化をたすくる証とや。たゞにすりよせてもちゐん。八糞ばかりにてはんなうまでもあるべし）うとまざる人あらんやあらざる人此を見とるべし。

水利　オモ

田に水をそゝぎ引事ハ。川よりの溝洫なくして引を田にハ溝を狭くほりて。其村の溜の水。或ハ又或ハ泉一二尺もれくるを通じて旱に絶ざるをもとゝす。洪水の時ハ。みつを蔵しあぐべし。若川近き所ハ堤を築。閘をかまへ。或ハ筧をかけ渡してとる所に汲上るハ桔槹。又龍骨車此類をもつて水をとるべし。但し渓谷のふかき所にハ立を造し。轆轤にて苗の枯ざる計あるべし。総じて大旱の器多くて。ハ早田にても痛む地なれバ。旱魃のあらんとする時ハ。いよいよかなく。霖雨の中も田のもるべう。らず。溝壙の通塞。ちかく堰の破損するを。常ゞと見。ひくきなどを不断の心に見れバ。早くも是を繕はざ

る汁どもすべし ○又池川もなく、ひくゝて竈あがり、とかる平地の田地は、井を掘りても水自らあふれ湧くことあるべし。て旱の難をのがるべし。天水なくしてやうやく他の所より手伝もなきざる所には、旱の備を作るべし。池は地にたくはへて溜池を作るには、其苦労久しくするのみならず。損亡もなくして、其うへ糞壌の手入も漸々に除う。にするなれば、肥田も後は瘠くなれるものなり。損益とよく分別して、旱の備をも溜置ずれ。分にまさる所を作るべし。世俗のあやまりを改めうる。くさかりのあしき田に、年々実りある備を作る人の

たからば、畜とのぐくわも失をまぬかるゝなり ○又屋のわきにも小池を掘り、井どもほりて、旱にそなへとすべし。木綿藍其外菜の類にも、極燥の中は畦の溝にちらくあるとそゝぎ引くうるほすべし。たとひ根痛ますとも、亢陽久しくうるほひ絶れば、必陰気めぐりて其実つまりしぬる物なれば、時刻をたがへずそゝぎ引く。溉気をやしなふべし。其上糞しを多くしてさそへ入合せ水をと引ざれば、糞のきくべき所も、土にてなやびうなるものなり ○又高田にはとうなぎ。高田又畠ある事、其後も水の用ある事、喩ば人の気血のごとし。

一水不足すれバかならず病を生じ。土地もまたく燥。湿乃過しひすらしぬれバ。かし日に痛まざれバ必ずは痛む。是るにかぎらず。よろづノ事。よき程過しひとはかるハ天道也。陰陽乃消長平まにをし根と交てかくからずさ理りなれバ。一偏にかたよるハ天のこゝろにあらず。いかに糞培をなしても。乾湿にかなはざれバ。天と功空しきになれバ。農まさるとも物の利のなけりのそなへをよくもちひ。蒔くゝとも後の耕して然ると良くびて従ふべし。穀物乃多く利しまさるとあるべし。然れ共水ハ陰なる陽気れるとするとよるすゝむ助けとなるべし。

おのづからもるゝとすべからず。とかくならざるを見とする地也　○本語蓋に。其郷かゝる利を求る田地を求るかひのなきと謂ふ。毎日多くとそくき。多く糞をうくる事。是とゆくく後世にする作人の徳云ほど所なれバ。あしく記さとなげど

穫収　第八

穫と稼と云。斂と穡と云。稼斂ハ年中の始終なり。まかりの新し秋穫収る事ハ始くも中のすく備り蓋蔵をつゝしまざるか。かゝく風雨にあふうことも寒為せんるすと時節もちるべからず　○　又曰稼ハ農なるの本。穡ハ農の終なり。本なくして末おほくなゆる

くして農功ある事ハ。其理なき事也。されば秋の収め多からん事を願はゞ。蒔付春耕しを遅うし怠るべからず。春のつとめあしければ。秋の其実入れ刈あらんとしりてぞて嚢中の物をとらるゝがごとくなり

○穀の秋みのり収めハ物ごとよく実のりて日和とよく見定め。豈よ火と殺がごとく。精力をつくし労をこへてすこしも油断なく刈収むべし。唯一時の風雨よりつ。年中の苦労を空しくする事もあれバ。夜を日につぎていそぐべし。新作ハかくしはやく刈おさめくらに入れバ安堵なるらねものなり。其年の農家の苦労をも必獲る日

あらぞハさてまつしざるゆへ。遊も無く刈収むるハ誠に大きなる幸。此上もなき事なれバ。祝悦びて大神に向ふべし。刈すまして天地ハ万物を生ずる気も人の心ある気もと二ツなき理なれバ。人悦べバ天も悦ぶ。然れバ天地の人を育ふより恵る穀物を事ゆへもなく刈収むるハ。有難き仕合なりと。丹誠を尽して祝悦び楽むべし。又人ハ誠により天地の感応あるハ。邪に私なくハ人にかハりて。これ道よくなるがごとく速なる事あれバ正直と云ふ。其意まれく力もいれずして其くれ幸ひ福をも得る事鏡に心

おしげず。終までも凡人のあさましきハ欲にひかされく。其ぜんざいをわきまへず。あらに貪るゝの欲深くして天のあたへを足とせずしてあまりあるハされ誠に天道にさからふ所なく。災を招く所なり。さきは人々貧富をば天にまかせ其職分としくはとめぐ天分と楽むべし。殊に農人ハ天の新しき夜の芸りにかを尽し時節の秋をおさめとはしりて刈取るべし。又種る物ハ陽気を受くる物ハ陰気によつて早く収る物ハ遅くまくべし。まくる物ハ一日も早く刈り先立とす。陽気ハすゝむゆへなり。刈収るハ時を急ぐ。

よく熟して一日なるもとそきたりとす。陰気ハそくちくゆへなり。されども麦を刈にハ初ハ先にあさき乾地とほつそのめどにするくてハ湿のに梅雨のおそれあり。後れさがへしもよ時ふをはれくて随く夜秋のみ芸りまもるべくなくるものハ作時も中分すべし。其芸をとさても刈るべし。○又蕎麦ハ十分に至るを待て上までおしずるをまきとらとめバ一夜の霜風にあひてハとおるしくもるもの也。豆ハ殊に熟すとも其きさやかれまにおかくおまる内に早くかるべくかへて干うちてもるも宜し ○ 又粟と黍と同じ類の物

されどきびハよくうるべし。さなけれバ実落ることあり。粟黍ハ早く刈べし。おそけれバ粃多し ○ 又刈収るに天気の陰晴をよく考ふべし。刈ことおそく雨にあへバ損ずることおほし ○ 又刈物ハ取付ぬ穂のうちすぐ。よくきへるときほしび見ゆべし。然にさうまうにくされバ穀実もおちやすく。ひごろ費も苦労してものゆかざる物なり。少しの造作といへどもよくこゝろを用ゆべし ○ 又前漢書に詔していはく、穀を種ることハ一色を多く作るべからずと。いへんしるれバ五穀を始めとして雑穀種々多く作れバ。○まくも其中に必利を得る物もあること

すれバ皆損するまでの事ハなし。若一種を多く作りよく。其熟する年ハ大利を得ることもあれども。まれハ稀にして災害にあふこと多し。農人必多くと作るべしと見えたり。猶土地の相応不相応をもはかりて其宜を求め作るべし

蓄積 付倹約 第九

夫農家ハかぎりなく骨折つとむれハまれに得て貯へてものハおほし。よつて雑穀を蓄へざれバ凶年にあひて飢をまぬかれ難し。然れバ常に用を省き倹約を守るべし。唐の堯帝の代に九年

の洪水あり。湯王七年の旱にあひ給へども民に餓死するものなかりしは、常に蓄積のそなへありてこそなれ。くして是を見れば、かくのごとし。ゆゑに五穀をたくはへて金玉といやしむべく、五穀にまさる宝はなしとせり。いかんとなれば、金銀珠玉は飢て食すべからず、寒くして是を着るべからず。此ゆへに五穀を蓄へ積をつむ。もし此計おろそかなれば、其国も不意の患難にあへる時、飢寒をまぬかれがたし。古は三年耕しく一年の食を餘せる法あり。貴きも賤きも大小上下それ〴〵分に應じて、是を分限とちからに蓄を以

けるゆへ、旱洪水虫風などの凶年のそなへとなりける。疫癘火災兵乱のわざはひありといへども、其蓄を以てすくふゆへ、国窮にせまるものはなかりしなり。是則其その身の分限をはかり、常に倹約をなして入をはかりて出をせいす。凶年不意の災をも防ぎ、愛を通ずるはなり。されば至智の人は禽獣も皆保つ日の報と思ひおつき（もずの草ぐき、みさごがすしなり）秋のくるも是皆冬の風雪霜のうれへに、たくはへおくは万物の自然の常なり。乃霊なる人として、たゞこさいやしき者、其分限をはかるず。凶年のそなへなくして万一つには不意の変

あるべきことを考へずして其用意をとゝのへんハ。誠に鳥獣にだもおよばずと云つべし。然れども時世の成行も唯一朝一夕の計ならず。俄に改めゆくべきにもあらず。先其常に正直忠信を守り。よく家業を力め勇みて詰り。倹約をもちゐ。其身に取納の分際をよくはかりくらべて直じて。其儀とつゞき用の事を斗りて紙済し。万の奢をやめ費をはぶくべし。是を時によりて七分に。し。古の聖法のごとく。其年の余業にて。其うちにも残りを以て一分を経し。不時の要を数へ備へし。治る三分をのけて。其年の済世とする。三つ是を毎年の定法として上下豊にくらすべし。若凶年かさ禄上に出用の不足すべくば。其ばかりを下民をめぐむにそうべし。又其年によりて剰をいふとも飢寒に苦しむ事もあるべし。故に文国あるの主よく〳〵ほどに蓄すべきは。其国にあまりある事なし。又ま

○又古ハよく倹約を行ひて。其より国家の費なるなれバ。天下の大都ハ云に及ばず。諸の国郷にあるまでも。倹約に蓄ゆるやうにして。名食もみち。諸侯のあまたの家を救ひ。窮民をめぐみしれり。又飢饉の小たる里々までも。急難の救として食

と蓄穀をたくハへをき。老幼又鰥寡孤独あれバくすり病者をめぐミ民乃災を救ふそなへとなれり。是を治平の政事ハいふ也。其事まことにあしく大さる事といふべし。天下の民として天子の代ハりて万民を恵ミ。民の父母たる職分を背けバ其罪ハ皆のかれがたし。ゆへかくのごとくなるべし。然るに末乃代になりてハ愚かき庶人ハ上の定むる事を知らず。身を惜ミ。甚古て風俗となりけりて。華美を好ミ。今の費をかへりミず。此乃時凶作の年となりけるや。是より凶年と飢饉を恐れず。此の変にあへバつきて食をこさねバ。たくはへもなく。一年も凶年なれハ其ん俗に満足して後乃難儀を忘れ。奢りに侈りとなりし。米穀を費し。身乃上を飾り。拵し。遊びに作りおせる所の物どもなれバ。云酒のごとく作り費やし飲みてくわし。果くさして凶年にあひぬれバ。家財を売り。田畠を売り渡し。他へ逃げ商乃事をあつかひ多くの利息を加へて合せられ。ついに貧窮の身となりて其業をまと志すことおかせてくらしいつへと懐くのことなり。是後よ治乃始より。たとへバ三年乃内。一年ハ蓄へ。一ヶは三ト一年ハ其を中かりて。九年ハ三年乃余別と蓄へおき。凶年にもおいてしまわざると。常にて甚

ガラス使用

こゝ不足なかるべし。されバ富ハ五福の一つなり。又書の洪範に八政には。一曰食。二曰貨とあり。貨も倹約をもちて。財宝をたくハへて。つひ用ゆるハ。上下とも高ども。人間の世をすくハ。第一の勤なるき。ゆゑにあれハなりて。是と財用を節にすると云ハ是ハ天下国家を治め。万民を撫やすんじ。一世まで安楽ならしむる根源なり。又家にてハ人々貧窮のくるしみをのがれ。人皆衣食たり。家居を安くし。一生一世の貧賤なしきものゝ。むつまじくなくて。飢寒にならべる。くハしき孝悌忠信も。是より行るべきさだめよくそれハ

なれバ。人ハ慎んでよく倹約をもちゐて無益のたぐひ費を禁じて。財をたくはへてそなへざる時ハ難儀あるべし。国家難儀も多く多く富あまるべからざることを致すべし。是則和漢の聖王明君の世を治め民をめぐみ給ふ政道なり。○又ちかく一家の人なり。吝嗇の人ハ心の病疾となりて。衣食器財を貪り納ることをのみ好み。是を積たくハへ。父子にも用ゐず。君親の難儀といへども。一銭をも助けず。まつたく親類朋友の困窮を見すごしても。いとはず仁愛慈悲の心なく。一向慾心ふかくして。義理のことハかへりみず禍

まうくる人ハ元下ハ又すくなかりし。たとへバ王侯太禄の富貴を極むる人といへども、唯是金銀を持たる畜類のごとし。人といひがたし。古人是を銭守る奴といへり。貨殖列伝を書し[illegible]人の上を作つく。[illegible]是非すべき[illegible]是を[illegible]皆よく[illegible]天の始なりとさるとよく知べし。

山林之総論　第十

[illegible]ゆる所ハ。深山幽谷の土地厚く深くも肥え[illegible]高き木。果ハ是れなり。[illegible]八年絶まくも其土地よ宜しき木をえらびて栽べし。古より[illegible]の

よハ十年[illegible]ハ樹をうゆるにありと云り。又木を栽る者ハ用を十年の後にまつべくして十年づゝも[illegible]まれバ用にたちもれなきと見えたり。况や杉檜松桐檀其外おひやすき木を肥地に植れバ十年の内外に必小材とハなると見えたり。薪とする雑木ハ[illegible]年をすぎずして用に立ものなり。或ハ桑漆茶楮の四木又柿梨桃栗などの菓樹ハ子をうへ或接木にして二三年をすごさずして実を結ぶ。[illegible]其用の材木果実の樹木に至るまで、よく[illegible]人力をつくして植るといへども益ある

く各。其本の条下に祀す　○又田家或は田畠の畔に木をうへ。常に宜しき前にはゆるも。西北乃風寒を防ぎ。東南の暖かなる和気を蓄へ。陽気の廻らに籠らん心得して栽ぬれども。其内に作る物の盛長も早くよくなる。古地は漸く肥。瘠地も變じては良田となるべし。假令肥沃の土地にても西北の風寒つよければ。和気を吹さまし田畠に害甚し。養ひを用ても。その気を吹ちらしむるゆへ作り物よくきくことすくなし。然れば謹て農事を持する者は。このまかひある菓と。風あまりにあらく吹時は其かひあるべく。性よくなると同じ理也。惣じて田舎

宜しき乃前には木をうゆるに多くの益あり。風寒をふせぐのミならず。盗賊の防ぎとなり。或林苑の果菜乃為にもなり。枝葉ハ薪の用を助け。多くハ間をみて伐て材木とし。落葉ハ掃て田畠の糞によろし。地ゆたかなり。菓樹を西北の方に植。竹を東北乃隅にうつく。栗を西南にひとつすれば。ねのる子也　○又家竃とたく生る菜も。杉檜なとの良木をうへときて。家の破損乃そなへにうふべし。其のミならず国に良材。四方より材とする物多ければ。捨れく。工人職人集まりよく乃器物を作り出し。或ハ商人其

器物を交易し。諸民のすぎはひあるによりて。老弱かたはものまでも。身のほどより所相応に孤獨のものまでやすくし。其國郡のよつゞハ國とも行渡り。くらしよく衣食を費をもとるすくなく。飢饉凶年ものがれやすし。其うへ寶貨の道も廣くなりて。民富ゆたかになりけり。されど田畠に續きて近くハ山林をもうけおくべしと見ゆる。されど深山の奥。人の通路も絶てなき所さへ。山中をも日用の悪木などハ除きて世の助とする。よき材木を出しひく人立ぬれバ。いとすくなきさへ。猶奥山までも。伐おちもとに運送すれバ

して。ちかき所の雜木にハ其を利潤分とせずましく。高山にハ川流もあるなれバ運送の宜きをとげゝり。て。ひさしくとゞまらず。おくち山なりて材木人にて。人里を遠さかりおく山にハ雜木ども多くして其手用とする者も少しと見えたり。山林の山中深くて運送の手にまかせね。雜木とて人まかしきことなり

○扨山ハ峰ハ土地の中にして肉のできる所すくなく。神靈の氣もあつまりて。其氣厚きゆへに精長する草木も平地よりハうるはし。然ど人の為にくらぶれバ山ハ瘠なく肉あつく。平原ハ瘠の下くして肉薄し。

ガラス使用

されば海辺ちかき平地に勝れたる材木のなきところあるは地の鹵きゆへなり○又薪の為に或は山の林をきし山林に漆と楮とをうゆべし。色々の器に作り又は物の柄ともなり諸木にもまさるなり。薪としては雑木に三倍せり。然れば山林に十三の法なり。漆の木下にておもしろくとなり。徳多くして損少き利益あり。是をおかくれともき必うゆべし○又史記の貨殖傳に安邑千樹棗。燕秦の栗。陳夏の漆。齊魯の桑麻。渭川の竹。其外の物をも多くも植立ておくる人は其富千戸侯とひとしく一郡ともなれのならびにもともしめ富なり

ところもちの本朝よくもこれに似たる事のなり。紀州。駿州。肥州のみかん。濃州。藝州の杉。防州。濃州。尾州。備丹波の栗。但馬の山椒。東国。小国の絹。縮。河内播磨の木綿。吉野の杉。其外は此国の土作の材木菓をふ諸国の名産にこれ多し。又穀に次て世を助るの用かぎりなし。然れども木の実とうへ山林をそだつるは年月にてみひさしくあるべし○又木竹を伐る時を定め又栽る時も月日を定めて山中きりとろりと信任立置くべし。凡此の類いまだ新作におもむかざる村里の人も心と合せ地をえらぶべし。

徳ありぞ。作木とゝもにたらしんハいかにくさからん合げ
らく。栽木菜菓にするも井せき溝渠の普請は
も。其人力を助け。或食物と費もかまハず潤ひ熟し。
多く甚多からんにも居室もその内ハ暖なり。衆の
勤め早起し心よくして。苦労なく家内に陽気みち
ねれバ疫病けがれもなく。上下男女の気もすゝし長
積善ひさしき徳ありとも。いつとなく百乃殃ハ遠き。その所
かゝる福のミ集るべし。是又古語にも。礼義ハ富足
に生す。盗賊ハ貧窮よりおこるといへり。衣食たら
ねれバ貧しき人の心も正しくして礼義をもちる。礼をしら

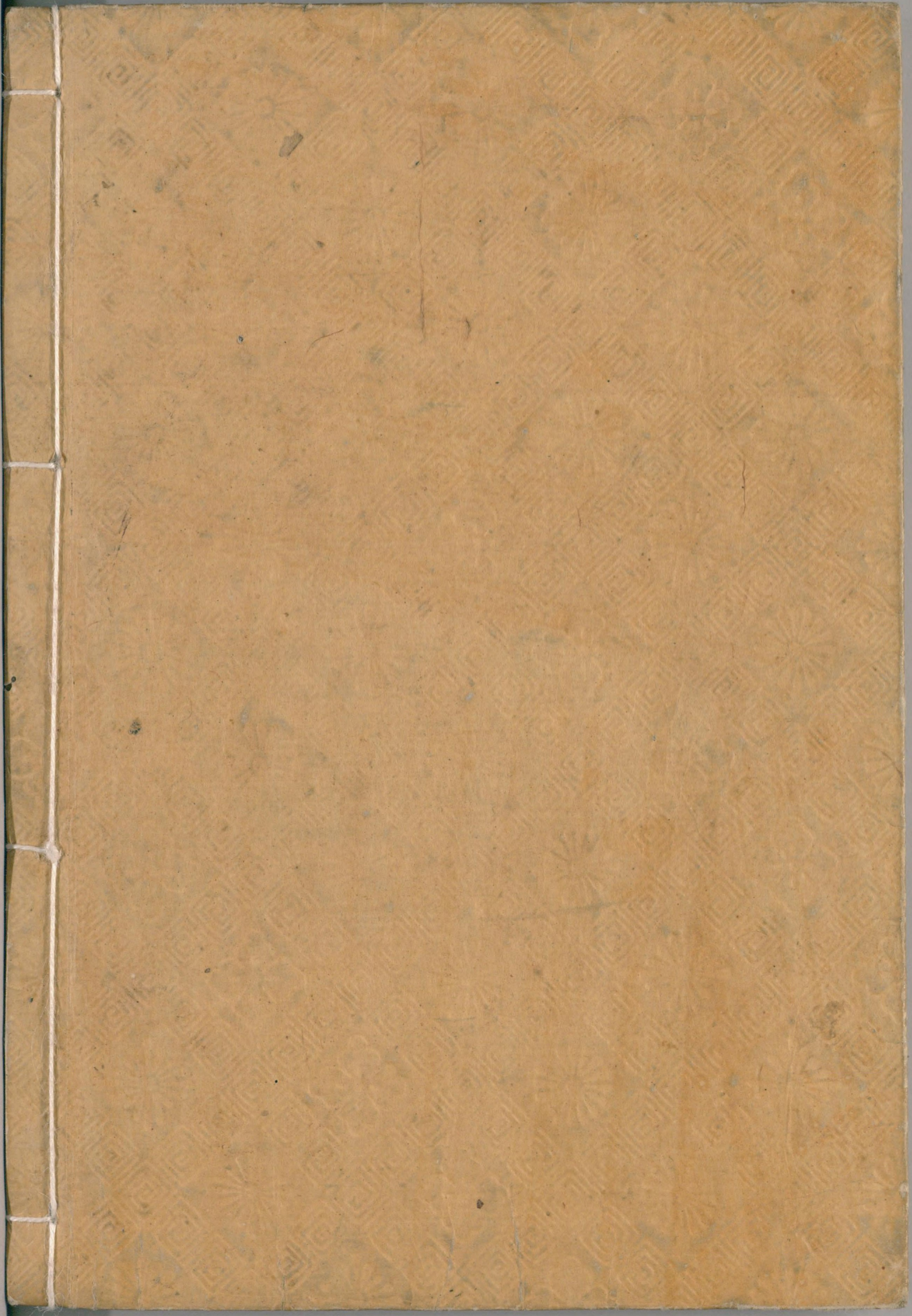
ずして身を治る道も。おのづからもしたがひ饒乃家となら
ん。命までも生計も内にそなハりて。本とゞむる
る事ハ。身乃生計をまもるにも。遊びて慶び栄さ
計ハ遠近の所にハまずいね乃つまり。目次乃
俗に云なることぞ。国家の政をするにも言乃
をおもしとおもふて仕なしよくすべし。
されバ中庸に。凡事豫すれバ則立。あらかじめせざれ
バ則すたると言おハれ宜しれバ則つまぐにも事おこし宜
ひれバくるしまずといへり。よろづの人ハ何事もおこたりなく
ずハ。其功なりがたし。其上種藝乃事ハ四木三草

と始とし。[illegible]生ずる所に多きゆへ少からず。必あらず五穀其外なれバそれぞれとこれを[illegible]後にこまかく[illegible]なく多くしへとして[illegible]の下より則[illegible]に立ありけり ○ 凡作て穀物を作れバ麻[illegible]なるものなれバ利をとらし[illegible]かなし。[illegible]其所を[illegible]ひく[illegible]地にあらハ穀物をまく作り得るも。[illegible]あるべき[illegible]地の宜き[illegible]四木を始とし。よく[illegible]つく[illegible]の[illegible]草木を栽べし。地の[illegible]穀[illegible]の次くハ[illegible]木をも[illegible]そ。[illegible]

代てしハ宝の道と祝しけり

四木ハ桑漆茶楮　三草ハ麻藍紅花是なり

農業全書巻一

特 7 11 456